
晋魂～しんたま～

スペディオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晋魂〜しんたま〜

【Nコード】

N0231K

【作者名】

スペディオ

【あらすじ】

高杉と銀時のポジションを交換してみました（笑）もちろん高杉甘党で性格変わってます。今のところちよくちよく修正しながら更新しています。

白夜又は止まることを知らない（前書き）

必読じゃなくしました。

こんな感じのオープニングにしました（笑）

白夜叉は止まることを知らない

暗闇の中一隻の船がゆっくりと漂っている。

「銀時様、アレの完成はまだもう少し時間かかるみたいッス」
そう言ったのは「紅い弾丸」と恐れられている来島また子。

「まあ、そんなに焦ることはないですよ。完成してしまえば、あとの祭ですよ。」

それに答えたのは自称「フェニミスト」を語るロリコンで戦闘はイマイチだが、頭脳は長けている武市変平太。

「ところで副総督はどうしてるでござるか？」

同じく「人斬り」と恐れられている河上万斎。

そして……

「ククッあいつにはちよつとやってもらいてーことあつから、京に残ってもらってる。それにしても早くこの世界が壊れていくのを見てみてーもんだなあ。」

闇夜に現れた綺麗な満月がその男の顔を照らす。

攘夷浪士の中で過激で一番危険な男であり、攘夷戦争の英雄「白夜叉」こと坂田銀時。

銀時

「まさか、俺と同じのあいつが幕府の狗に成り下がっちまってたあとはなあ。」

キセルを吹かしながら呟く。

万斎

「どうするつもりでござるか？」

銀時

「決まってるだろーが。こっちに戻してやるよ。あいつらもな。」

また子

「あいつらって黑夜叉どものことッスか？」

また子が割って入ってくると

銀時

「まあ確率はねーとは思うがなあ。……………また新しい伝説つくるには派手にいかねーとなあ……………」

クククと銀時の笑いとともに船は暗闇に消えていった。

この始まりが第二次攘夷戦争という名の最大の祭の序章。

白夜又は止まることを知らない（後書き）

真撰組のあいつとは、オリキャラの予定です。ぼちぼち出していくかもしれません。

次から原作沿いですが、段々オリジナル化していく可能性があります。駄文ですが、よろしくお願いします。

1、夜道の散歩は危険。（前書き）

原作沿い断念していきなりオリジナルストーリーにしちゃいました。
いろいろ変えちゃってすいません！！

1、夜道の散歩は危険。

約二十年前どこからともなく現れた異人、天人。あまんと

侍達は国を取られまいと、数年間行われた攘夷戦争で善戦したが、

天人の圧倒的な力に屈し、幕府が降参して不平等条約を結んだ。

幕府に裏切られ、残された侍達は“攘夷浪士”という名の反乱分子として殆ど粛正された。

そして今現在、天人たちにより江戸の真ん中で街のエネルギーとされる「ターミナル」が建てられ、他にもいろいろな文化で盛んな街になった。

一つ変わったのは…もう侍の街ではないということだ。

しかし一人自分の武士道ルルを貫き通す侍魂をもった男がいる。

く江戸「歌舞伎町」く

深夜0時過ぎてもスナックやら酒屋やらでの明かりで絶やさないこ

こは夜の街とも呼ばれる。

明かりとは掛け離れた暗闇の裏道に二人歩いている

「長谷川さ〜ん、もう一軒行こうぜエ〜あはは〜……」

「晋さんもうデロデロじゃないかあ〜。俺はもうやめとくよ。」

一人は紫が入っている黒髪に派手な女物の着物、そして左目に眼帯をしてるこの作品の主人公、高杉晋助。酔っ払っていてキャラ崩壊中。これでも攘夷戦争で「黑夜叉」の異名を持つてる。ちなみに顔に似合わずにかなりの甘党だ。

もう一人は長谷川泰三。前は幕府の管理局だったが、ある事件でクビになった。今は……ただのマダオ。

晋助

「チツ…つれねえなア。」

などとやりとりしていると、殺気を感じたため、酔いが醒める。

晋助

「危ねエエエ!!!!!!!!!!」

長谷川

「えっ？」

ズガァァン!!

晋助が長谷川の腕をひっぱり地面に伏せる。
音がしたところを見ると長谷川のいたところに銃弾がめりこんでいた。

撃つたのは赤いへそ出しの服に、丈の短いスカートを履いた女で、建物の上から飛び降りながら晋助に向け二丁拳銃を打ち続ける。

晋助

「チッ!!」

直ぐさま木刀で全ての弾を弾いて相手が着地したところをブーンとすばやく叩きにいったが、バク転で回避される。

晋助

「テメーは一体何モンだああ!!」女は答えずに、少し離れたところ にいた長谷川に銃口を向ける。

晋助

「長谷川さん!!逃げろオオオ!!」

晋助の声にやっと反応し、逃げ出そうとしたが、

「そうはさせないでござるよ。」

長谷川

「っ!!」

突然、長谷川の前からツンツン頭にヘッドフォンとサングラスを付けた男が現れた。

晋助

「テメーは!!あんときの!!」

万斎

「久しいな、黒夜叉。」

そう紅桜、真撰組動乱の時にいた河上万斎だった。
また子

「あたし抜きで話すなッス!!」

紅桜で晋助とは会ってるような…ないような感じである来島また子。

晋助

「テメーら何が目的だぁ!？」万斎

「今更何を言う、黑夜叉。拙者らは銀時とともにこの世界をぶち壊そうとしているのであるう。だが、今回の目的は黑夜叉…高杉晋助お主でござるよ。拙者らと来てもらおう。」

万斎がそういったのを驚いた晋助と長谷川。

晋助

「誰がテメーらと一緒に行くかよ!」

と万斎のほうに走りだしたが、また子に止められる。

また子

「動くなっス!コイツがどうなってもいいんスカ!？長谷川」

「ひっ!…!」

長谷川に向けて引き金を抜こうとする。

晋助

「て、テメーら…!…!」

晋助は助けようにも助けられない。

万斎

「この者を守りたければ素直についてくるのが得策でござると言いたいとこだが……」

「ご用改めである!神妙にお縄につきやがれえええ!…!…!」

万斎が言い終わる前に黒い群集……真撰組に途切られる。その中には近藤、土方、沖田、山崎がいた。近くの人が騒ぎに気づき、通報したようだ。

また子

「チッ！邪魔が入ったッス！」

万斎

「では…黑夜又またそのうち。」

二人は建物の上を飛び越えて去っていった。

土方

「待ちやがれ！つてお前！なんでこんなところにいやがる！」

追おうとしたが晋助がいることに気がつき、部下に二人を追わせる。

晋助

「よお。調度いい、テメーらに話がある……こいつあ他言無用で頼む。長谷川さん、あんたは帰りな。」

長谷川

「わかった。」

と言って長谷川は帰っていった。

晋助

「ここじゃあ、なんだからテメーらんとこでいいか？」

近藤

「ああ構わないが……お前さっきあいつに黒夜叉って……」

近藤の言葉に土方、沖田、山崎も晋助を見ていた。

晋助

「そのことを含めて全部あっちで話してやるよ。捕まえるかどうかはその後だ。」

晋助がそういうと、近藤は頷き土方らのほうをみて、…お前らもい
いか?」と聞いた。

土方

「まあ近藤さんが言うなら……」

沖田・山崎

「「同じく。」」

三人は頷いた。

すると近藤は思い出したように晋助に聞いた。

近藤

「そついえば、新八くんたちには言わなくていいのか?」

晋助

「あいつらにも言つさ。言わきゃうるせーだろ。」

近藤

「そつか。なら朝に聞くことにしよう。」

晋助

「ああ。」

そのあとは五人でパトカーに乗り、屯所へと向かった。

く????く

「そーか。邪魔が入っちまったか。」

そういったのは銀髪为天パで紅眼、そして真っ白な服を来てキセルを吹かしている銀時。

万斎

「すまぬ、銀時。やはりあちらはホームでござるからな。簡単にはいかぬな。」

済まなそうに言う万斎。

銀時

「ククッそうかい。まだ様子みてようじゃねーかあ。だが、万斎、二度目は…　ねーぜ？」

最後のほうで死んだ魚の眼からギラリとした憎悪しかない眼にかわった瞬間、ゾクッと体全身が硬直した。

（あれが白夜叉の眼…）

考えるだけでぞっとする万斎に銀時は満足しながら「ククッ冗談だぜ？」一言言っただけでその場から立ち去った。

万斎

「冗談には聞こえないでござるよ……」

万斎はそっと呟いた。

1、夜道の散歩は危険。（後書き）

当分ださないと言ったのにまた鬼兵隊だしちゃいました。

次回は万事屋、真撰組メンバー&オリキャラでます。あの人の弟です！

次回「いつかはばれるが…これは早過ぎ」です！！

2、いずればれるが…これは早過ぎ。(前書き)

少しだけ長いです。

予定通り万事屋&真撰組&オリキャラの登場です。

真撰組は少しだけ前話にでてましたね……。

2、いずれはれるが…これは早過ぎ。

今近藤、土方、沖田、山崎、晋助の五人が同じパトカーに乗っている。もちろん、山崎が運転している。晋助が黒夜叉疑惑があるため、少し思い空気なっているが、程なくしてそんな空気を吹っ飛ばすかのように近藤が晋助に声をかけた。

近藤「流石にこんな時間から新八君達を呼び出せないな。お前、一旦万事屋に戻るか？」

晋助「いや、めんどくせーし。そのままテメーらんとこにいさせてもらうは。」

近藤「ははは！！お前らしーな。それなら部屋は用意しておく。」

晋助「わりーな、ゴリラ。」

近藤「え？なんでそこでゴリラ！？ゴリラとしてしか見てないの！？ってか人間だから！！」

晋助「わかったわかった、ゴリラは黙ってジャングルか、動物園に帰れや。」

近藤「全然わかってねーじゃん！！何コイツ？？？ねえ？？？何なの？？？」

いつもの調子で話す二人に緊張が解れ、三人は思わず苦笑してしまう。

そしてしばらく立つと「武装警察真撰組頼所」の看板が見えたのでパトカーを停めて五人は降りて門をくぐり、中に入ってしまった。先に山崎が「お先に失礼します」と言って部屋に戻っていったのを確認して晋助に部屋を案内した。近藤達は自室に戻るうとする。近藤「そういえば、朝は零番隊が帰ってくるんだったな。それまで寝るか。」

沖田「初耳でさあ。それ本当ですかい？」

土方「俺も知らねーぞ？」それ聞いて土方と沖田が少し驚いたのみで近藤はキョトンとする。

近藤

「あれ？言ってなかったっけ？とつつあんから報告つけてさー。」

土方

「はあー…これだから近藤さんは…」

沖田

「これが近藤さんだから仕方ないでさあ」

二人は呆れると、晋助が割って入ってきた。

晋助

「つーかよお、そんな部隊いたんだな」

近藤

「そういえば、万事屋は知らなかったな。零番隊はな強者ばから揃っていてうちの最強の特殊部隊だ！」

晋助

「へえーそんなやつらがいるのか、会ってみてーってか会えるか」

近藤

「朝になればどんなやつらかわかるさ。」

…じゃあな”と言って三人は部屋を出ていった。

晋助

「さーてとつ、俺も寝るか。」

あいつらには朝電話すればいいかあ。」

晋助も布団に入り、そのまま目を閉じた。

く朝・万事屋く

「晋助さん、どうしたんだろう……何もないといいんだけど……」
と不安になりながら呟いたのは、黒髪に眼鏡をつけ、地味な服をきた地味な少年、志村新八。このオーナー高杉晋助が昨日の昼から……ちよつくら長谷川さんと飲みに行ってくる。今日中には帰る……と言つて出かけたつきり帰ってきてない。

新八はもう一人の同居人が心配で家には帰らずに万事屋に泊まった。
新八

「まああの人なら大丈夫か」

とても強いし、何よりあの格好であの顔なら、恐くて近寄りがたいし……

などと考えながら押し入れにかけ、襖を開けた。

新八

「神楽ちゃん。朝だよ。起きて」

神楽

「んゝふあああ。新八おはようアル。」

新八

「おはよう神楽ちゃん。」押し入れからでてきたのは、ぼさぼさになったオレンジ頭に大きな目に蒼い瞳、かわいらしい顔してエセチヤイナ服を着ている宇宙最強戦闘種族「夜兎族」つまり天人である神楽。

新八

「顔洗つてきなよ。ご飯用意してくるね。」

神楽

「んゝ」

と眠そうに返事する神楽に苦笑しながら、新八は台所に向かい支度する。

ある程度時間たつと

新八「できたよ。食べよう。」

二人

「いただきます。」

ご飯を食べていると、神楽が少し元気ないように見える。

新八

「神楽ちゃん、どうしたの？」

と聞いてみると神楽は疼きながら

神楽「晋ちゃんまだ来ないアル。」

普段毒舌だが、なんだかねで晋助にはかなり懐いている。

新八「晋助さんなら大丈夫。あの人は何があっても必ず帰ってきたじゃないか。家はここしかないんだから帰ってくるよ。」

新八が安心させるように言うと

神楽「新八にしては良いこというネ。」

新八「にしてはは余計だよ。」

少し元気になった神楽に少し笑いながら言い出す。

ご飯を食べてからテレビを二人でテレビを見ていた時
ちりりりん

と黒電話がなったので、

新八が受話器をとって出た。

新八「はい、もしもし。万事屋ですけど」

相手は先ほど心配だった人、晋助からだった。

晋助「よっ新八」

新八「晋助さん！！どこにいるんですか！？」

思わぬ人からの電話で大声を上げる。

晋助「あゝうるせえよ！！叫んでんじゃねーよ！！今訳ありでな、税金泥棒とこにいんだよ。つーわけで大事な話があるから今からこつちにこい。」

新八「えっ！？ちょっと！？晋助さん！！」

ブチッと切られツーツーツツとしか聞こえ無くなってしまったので、仕方なく受話器を置いた。

すると神楽が「晋ちゃんアルか！？何処にいるネ！！」と叫びなが

ら向かってきた。

新八「晋助さんからで大事な話があるから真撰組に来てだよ。大事な話ってなんだろうな……」

神楽「そんなの行けばわかるヨ！早く行くヨロシ！」

と先に物凄いスピードでペットの巨大犬、定春と共に行ってしまった。

新八「待つてよ！神楽ちゃん！」

と新八も後を追った。

（屯所）

晋助「さてと、あいつらに電話したし本当は話したくないんだがなあ……あいつらにはあのヘッドフォン野郎のおかげでばれちまってるもんだし、仕方ねーか。」

晋助は普段、自分の事は話さない。ましてや過去のことならば尚更である。

あの忌まましい記憶、攘夷戦争でどのくらい大切なものを失い、どれくらい悔やんだか数知れないほどにある。

晋助（黑夜叉なんてつけられたが、伝説なんかじゃねえ、英雄でもねえ……何も救えなかった、ただの臆病者だ……。なあ、先生。今の俺を見てどう思いますか？）

今に雨が降りそうな空を見上げ、悲しそうに顔をする。自分に生きる理由を教えてくれた恩師を思いながら……。一人それを見てたのを気づかずに……。

沖田は近藤の部屋に行く為に廊下は通ると、外にいる晋助を見つけ、声をかけ……。れなかった。なぜなら悲しいそうで苦しそうな顔して空を見上げてるのを見てしまったからだ。

沖田「……（旦那……なんであんたがそんな顔してるんですかい？……なんでそんな泣きそうなんかい……）」
と考えているといきなりこちらに振り返られたので固まってしまった。

晋助「よー沖田あ、どうした？」

沖田「あ……いや、近藤の部屋に行こうとしてやして……」

晋助「そういえばそうだったな……」

やっと喋ることができたのに安心する。

近藤の部屋に集まって、話すことになっている。

晋助「場所知らねーから、案内頼むぜエ。」

沖田「あ……へい。」

沖田と晋助は一緒に近藤の部屋に向かった。

向かっている途中、そこからドドドドッと砂煙を起こし、すでに定春から降りた神楽は晋助を見つけ瞬間、上記の通りに走り、飛び

込んできた。

神楽「晋ちゃああああああん!!」

晋助「うおっ!! って神楽か。」

あまりの衝撃によるめいたが、なんとか受け止めた。
神楽「晋ちゃん!心配したアルよ!!」

晋助「悪かったな。心配かけちまってよお」

ぎゅっと抱きしめてくる神楽の頭を撫でる。

新八「ハア…ハア…晋助さん……。」

息切れしながら新八も到着したようだ。

晋助「新八、悪かったな。」

新八「いえ、晋助さんが無事なら良かったです。」

晋助が謝ってきたが、新八は晋助の無事な姿にホッとする。

「なんだか、盛り上がってんねー」

また別の男が後ろに隊士を引き連れ話かけてきた。

沖田「銀次さん!!」

晋助「!?銀次!?!」

銀次「沖田くん久しぶり…って…高………杉?」

沖田が銀次と呼んだことに晋助が顔を見て驚き、銀次も沖田に挨拶してから晋助の顔を見て驚く。

沖田、神楽、新八はポカンとする。

沖田「二人は知り合いなんですかい？」

沖田が聞くと

晋助「ああ。」

銀次「昔からのな。」

二人は頷いた。

土方「オイ、遅い。何してやがるテメーら！！って銀次か……久しぶりだな」

近藤「銀次じゃないか！！おかえり！！」

来ないのがおかしいと思ったのか土方、近藤がでてきた。

銀次「たでえーま近藤さん、土方くん。」

なんだかんだで銀次も一緒に近藤の部屋に入っていた。
近藤「それで、万事屋、話の続きなんだが。」

（へえー。高杉って万事屋やってんだ…お前らしいな）

近藤の言葉に銀次はそんなことを思っていた所で晋助が話します。
そして何の話か聞くと、

晋助「夜中に鬼兵隊の二人に会った。」

新八、神楽「！！」

銀次「オイオイ、まじかよ…」

二人は驚いたが、銀次は引き攣った顔をする。

晋助「名前は知らねーが、サングラスつけたヘッドフォン野郎と、
金髪のへそ出しねーちゃんだったぜ。」

銀次「河上万斎と来島また子だな。」

銀次は確信する。

晋助「それに…目的は俺だったらしい」

今度は全員驚愕する。

晋助「なあ、銀次。もう言っていていいだろ？」

銀次「ああ。俺も覚悟はできている。」

晋助の考えに何かを悟ったのか頷いて同意する。

「「「「「？」「」「」」

五人が首を傾げていると、晋助は全てのことを話す。

昔、晋助、銀時、銀次、小太郎は吉田松陽の生徒だったこと。松陽が濡れ衣を着せられ、幕府に目の前で殺されたこと。攘夷戦争に参加したこと。

そこで知り合った快援隊隊長、坂本辰馬とともに戦ったこと。幕府が白旗は掲げ降参したことにより、負け戦になったこと。

晋助「てめーらが上の連中にどう教えられたかは…知らねー。だが、それが事実だ。」

銀次「おそらくは全然違うことをでっちあげてんだろうな。」

二人の発言に全員押し黙る。

晋助「そしてもう一つ、あの河上ってヤローが言ってた通り、俺が黒夜叉だ。」

銀次「そして俺が第二の白夜叉だ。」

晋助「お前らは俺達を…」

銀次「捕まえるか？」

空気が更に重くなった気がした。

誰も口を開けず、長い沈黙だけが続いていく…。

そして外で聞いていた零番隊の隊士達は銀次の過去を知ってるため心配そうに見ていた。

くおまけく

そういえば真撰組 & a m p ; オリキャラ名前しか紹介してないのでこの場を借りて改めて紹介しますね。

近藤 勲

真撰組局長、ストーカー（妙限定）、ゴリラ。

土方 十四郎

真撰組副長、マヨラーで鬼の副長とも言われている。上と下の問題を抱えるすごい苦勞人。

沖田 総悟

一番隊隊長。サディスティック星からきた超ドS。副長の座をねらっている。

晋助・ 銀次にはかなり懐いている。

坂田銀次

オリキャラ。零番隊長。銀時の弟で攘夷戦争では「第二の白夜叉」と呼ばれている。

2、いずればれるが…これは早過ぎ。(後書き)

なんかごちゃごちゃになりました(笑)

でわ次回「血がつかなくなっても、それでも家族と呼べる存在」の
予定です(笑)

3、血がなくなっても、それでも家族と呼べる存在。(前書き)

最近毎日更新してるな〜ってことで

本編始まり〜

3、血が繋がらなくても、それでも家族と呼べる存在。

晋助・銀次の思わぬ真実に暫く沈黙が続いていたが、近藤、土方、沖田の三人はようやく口を開く。

土方「……俺達は、天導衆の連中は自分らの都合のいいように真実を覆された偽り事を教えられたってか」

近藤「まさか幕府がそんな事をしてたなんてな……」

沖田「旦那が黒夜叉で銀次さんが白夜叉……それに銀時って野郎と桂とも幼なじみだったってことですかい」

三人が啞然としていて、新八、神楽は下を向いていた。

そこに晋助が意外そうに尋ねた。

晋助「新八と神楽は……桂から池田屋んとき聞いたんだ。てかテメーら長年追っていた野郎の名前知らなかったのか？」

それに銀次が答える。

銀次「近藤さんらは白夜叉が1番危険な攘夷浪士で鬼兵隊の総督としか知らされてなかったからな。」

それに続いて土方が「いくら名前を調べても、桂、坂本意外、白夜叉と黒夜叉しか乗ってなかったからな」

苦い顔でタバコを吹かしながら言った。

すると銀次が

「名前は坂田銀時、俺の……兄貴だ。」

今まで下を向いていた新八、神楽も銀次の方向を見て目を見開く。それもそうだ、同じ銀髪で死んだ魚のような紅眼。銀次はあまり死んだ眼をしてないが、確かに似ている。だが、あのやばすぎる人が兄貴だなんて…と信じられない顔をしている。

それは土方、近藤、沖田も同じだ、銀次はともかく、自分達が追っている過激派攘夷浪士が銀次の兄。敵同士になってしまっているから。

銀次「もうたった一人の血のつながった家族なのに……こんなに遠い存在になっちまった……ホントに俺達兄弟して馬鹿だよな。だけど兄貴以外でも血いつながっていなくても俺あのなかでは高杉、桂、辰馬はもちろん。それに近藤さん、土方くん、沖田くん。真撰組の連中が家族になっちまってたんだよ……」

と悲しい顔をしながら銀次は言い、最後は軽く微笑んだ。

「……銀次……。」

土方・沖田はまっすぐに銀次を見つめて微笑み、近藤は号泣している。

銀次「俺の隊はこのことは知っている。それでも俺について来てくれた。これからもついて来てくれるか？」

襖の外にいる隊士の連中に聞く。すると、隊士達は思いっきり襖を開け、

「俺達は一生あなたについていきます!!」

「隊長を裏切るなんてとてもできません!!」

などと声を上げる隊士をみて

銀次「俺あ、幸せもんだなあ。」と嬉しそうに呟いた。
それを見ていた新八と神楽も晋助に顔を向ける。

新八「僕はあなたの過去の虚しさを知りました。そしてあなたのやつてきたことも知りました。ですが、僕達は知ったからって晋助さんに畏れたりはいしません。僕達の知ってる晋助さんはグータラで万年金欠で仕事しないマダオです。それに、いざというときには守ってくれるとても優しい晋助さんです。」

今までを思い出してるかのように話した。続いて神楽も「晋ちゃんはどう思っついていようと、私達にとって大切でとっても大好きな家族だと思ってるネ！！だから……」

最後に

二人「これからよろしくお願いします(ヨ)！！！」

蔓延の笑みで二人合わせた。それに答えるかのように
晋助「フツもう何も背負うこともあるめえと決めたのにまたいつの間にか背負いこんじちまつてる。新八、神楽。オメエら荷物がいいーとつまなくなるほど……俺の大切な家族だよ。ありがとよ。これから頼むぜ？」

と言った瞬間、返事のかわりに晋助に新八と神楽は飛び込んできた。
晋助は微笑み、やさしく二人を包み込んだ。そしてポツリと

「俺も幸せだよ」と呟いた。

すると、今まで黙っていた近藤が喋りだした。

「内密にするがこれだけは言っておく。万事屋、銀次。お前らのことはすべてわかった。二人は攘夷活動していい。俺達は捕まえない。俺達にはいい。」

と微笑む。これには新八、神楽もホツとする。土方が「桂やお前の

兄貴のことはいつも通りにおうがな。」と付け足す。

銀次「ククッ兄貴はともかく、桂はしつぷといぜ？なんせ」

銀次・晋助「ゴキブリ並にうぜーからな」

二人同時に言う。

沖田「それもいつもことじゃありませんか。」

沖田も笑いながら返す。

晋助「さてと、俺達は帰るぜえ。行くぞ、新八、神楽。」

「ハイ（おうネ）！！」

三人は帰ろうとすると、

近藤「お前ら、気をつけてな！！」

土方「まぎらわしいことしたら、しよつびくぞ。」

銀次「何？それ俺にも言ってるでしょ？死ねよ。糞マヨラー。」

沖田「そうだそうだ」。早く俺が銀次さんに副長の座わたしてくだせえ。」

沖田・銀次「さつさと死ねよ、土方。」

土方「テメーら！その腐りきった根性たたっ斬ってやらあ！」

晋助は後ろで騒いでるやつらを見て、”まったく馬鹿なやつらだなあ。でもこんなことでも平和だと想う俺も馬鹿だな”と思いながら二人と仲良く帰っていく。さらに裏腹にはこんなことを願っていた。

なあ、銀時イ？

紅桜んときは、最後にお前にヅラと一緒にあんなこといったが、俺あ、テメーを斬れねーよ。そっちは斬ってくると思うがな……だが銀次はもちろん、俺、ヅラ、辰馬はそんなテメーでも家族と思ってるぜ？

だから……頼むから馬鹿なことだけは……やめてくれよ……銀時……
……。先生はいなくてもまたあんどきみたいに五人で飲もうや……
そうただ……ただ願うことだけだった……。

く京にてどこかの廃工場く

ここの廃工場の中には、大きなカプセルが無数にもある。中には刀であろうどす黒く、不気味なものがはいつている。
それを満足そうに見ているのが二人。

「ククククッ、一本だけ隠して置いた紅桜でまさかこんなにも造れ

るとは、さすがだな、副総督さんよお」

と銀時が笑っていいだす。

「うるせーよ、銀時。俺を誰だと思ってやがる。たかが一本だろうが、この機械からくりで造ればこんなもんよ。」

赤髪で黒い着物を来て愉快そうに言ってるのは、あの平賀源外を越えるほどの天才カラクリ技師で、万斎と同じ人斬り赤鬼せつきと異名を持つ鬼兵隊副総督、桐生藤間きりゅうとうま。

銀時「テメーで造ったんだから、使ったっていいんだぜ。名前はあんなのか？」

銀時が聞くと藤間は

藤間「あんたが造れって言ったんだろが！まあ、そうだな、この刀どす黒い闇を感じるし、紅桜を基にしたんだ《闇桜》やみやくらってのはどうだ？単純に考えたただけだけど」

銀時「闇桜ねーいいんじゃないか。今日からそれがお前さんの相棒だ。完全に完成するまで慣らしとけよ？」

藤間「ああ。わかってるつて。」

銀時「最初の祭はでかくねえとなあ？」

ククククッ

…テメーら、こっちに早く戻ってこいよ。なあ、特に銀次…高杉…銀時の笑い声だけが暗闇に響いてく……まるで、絶望を導くかのよう…。

3、血が繋がらなくても、それでも家族と呼べる存在。（後書き）

はい。またオリキャラでした。適当に考えたら、その名前になりました（笑）ってことで

次回「馬鹿は同じところに集合する。」あのキャラ達が登場しますよ。
」。

ちなみにまだ銀時らは動きません。

4、戦友は集まる場所は一緒（前書き）

サブタイトル変えました。

4、戦友は集まる場所は一緒

江戸中を走り回って逃げている男とそれを追いかける連中がいた。

「む……しつこいな」

逃げているのは、高杉晋助らとともに攘夷戦争を戦いぬき、今は思想を掲げる穏健派攘夷浪士、桂小太郎。

「かあつうらあああ!!」

それを追っているのはご存じの通り、武装警察真撰組。土方、沖田を筆頭に追跡する。

いい加減、面倒くさくなり、「狗は狗らしく、しつぽ巻いて帰るがいい!!」と言い、桂は「んまい棒」を地面に叩きつけた。
土方は舌打ちをした。

「煙幕かつ!!ちっ!!まあ銀次がいるから大丈夫か。」

「いや、銀次さんだからこそダメですぜ。銀次さんと桂は幼なじみで、戦友なんですから。」

沖田の言葉に土方はある事に思い出し、叫んだ。

「あー!!!!そーだったあ!!!!失敗しちゃった!!!!!!銀次イ

「イイ！！俺たちが行くまで逃がすなよ！！」

その事をすっかり忘れているのに気づき、叫びながら銀次がいるであろう場所に向かっていく土方。

それ見て「はあ…」と呆れながら沖田も後を追った。

「ふう…。やっと巻いたか。」

と桂は周りを見渡していると、近くに《万事屋晋ちゃん》と看板があるのを見て、苦笑する。しかし「よお」とどこか聞き慣れた声が後ろからしたので振り返ると「！！お前！！銀次か！？」

「ヅラあ、久しぶりだなあ。」

真撰組の隊服を着た銀次がいて、周りにも連中が控えていた。

いつもの“ツラじゃない、桂だあ！！”といつものツッコミは言わない桂は銀次が真撰組にいるのに驚きだす。

「終戦後、高杉とともに姿を消したきり途絶えたと思ったら貴様、何で真撰組にいるんだ！？」

「あの後さ、高杉とも逸れて迷ってたら、近藤に拾われたんだよ。今じゃ特殊部隊で隊長やってんだぜ。笑えるだろ？」

銀次はニヤリと笑い、

「だが、俺あ、幕府の下についたつもりはねーよ。近藤が俺を救い、置いてくれた。だから俺は恩人を守るだけ。ただそれだけだ。」
キッパリと言い放った。後ろを向いて「俺についてきてくれたお前らもな」と言っつてフツと笑った。

隊士達全員“この人に着いてきて良かった”と心からそう思った。

桂はだまってその様子を見てるとフツと笑い

「お前も高杉と同じ大切な荷物をもったな。」
安心したように言った。

「ああ。それよりもうすぐ土方が血相変えて向かってくるぜ？高杉んちにでも匿ってもらえば？」

「そうさせてもらおう。」

「さらばだ」とすぐ近くの家に向かっていった。

「さーてと、あとはマヨラーだなあ。」

と物凄い勢いで走ってくる鬼の副長にどうするか考える銀次だった。

一方万事屋ではソファでジャンプを読んでいた晋助がいた。神楽と新八は志村家にいる。

「あゝくそ暇だなあ、オイ。」

一人はやはり暇すぎる。

「かと言っても金はねえし……寝るか。」

と寝ようとするが、ピンポンとインターホンになる。

「ちっ…誰だよ…依頼かあ？」

ブツブツ言いながら渋々玄関に向かっていく。

「あゝ新聞なら間に合ってますよ」

ふざけた口調で戸をあけると桂がたっていた。

「何しにきたんだよ？ツラア？」

「ツラじゃない、桂だあ！！嫌、真撰組に追われているところ銀次に助けてもらってな、お前んちに匿ってもらえって言われたからつい。」

「何してくれてんだよ、あいつは！？ってかあいつも真撰組だよね！？何で敵逃がして人に押し付けてんだあ！！！」
いない銀次に怒り覚え、叫んだ晋助。

「まあ落ち着け、高杉。まず座るんだ。」

「何ちゃっかり座って茶あ啜ってんだよ！！！！ここは俺んちだあ！！！」

「ブハッ」

あたかも自分んちかのように居座る桂に飛び蹴りをくらわせると桂はぶっ飛んだ。

「たくよあ、何なんだよ。今日は厄日かあ？」

はあー、ため息を付いた。

しばらくして漸く復活した桂、急に真面目な顔をしたので気になる。
「それより貴様に『ドオオオオオン！！』……なんだ！？」

言い途中で物凄い音に驚き、晋助はピクピクといかにも切れそうだなぜなら……見覚えのある宇宙船が墜落し、万事屋の屋根を半壊したからだ。

そして、中からも見覚えのある人物が出てきた。

「いやあ、やつちまったのう。アハハハハ」

と笑いながら出てきたのは、黒髪でテンパ、サングラスをかけていて戦友でもある坂本辰馬だった。

「おっツラとチビす……チビじゃねえ！！！！！！晋助だ！！！！し・

ん・す・け！！！！！テメエそのあだ名やめろや！！！！！！んでも
って何回人んちの屋根壊してんだゴラァ！！！！！！！！！！」…ブ
ホオオオ！！！！」

と二人がいるのに気づき、声をかけようとしたが、晋助が割って入
り、桂同様、跳び蹴りを食らわした。

「てかよお、テメーらはよ、まじで何しにきたんだよ。くだらねー
ことなら帰れよ。」

「坂本はどうか知らんが、俺は用があるから来たんだ。」

「わしもあるんじゃ。」

桂と坂本が真剣な顔して話そうとすると

「俺も話あるから上がらせてもらっぜ。」

「！！！！！！！！」

いつの間にか銀次も中に入ってきていた。

「おお、金次じゃあ！！！！久しぶりじゃの。」

「よお、辰馬。ヅラはさつきぶりだな。それ銀だつて……。兄貴が
いたらぶっ飛…嫌、今の兄貴だったら斬り殺してたな……………」

銀次は呆れながらも、悲しそうな顔して坂本に言った。坂本は「？
どういうことじゃ？」と頭に？を付けて問うと、今までのことを話

した。

銀時が起こした紅桜の件で、高杉と桂との縁を断ち切ったこと。さらには宇宙海賊“春雨”と手を組んでいたこと。

銀次はいなかったが参謀の伊東鴨太郎を使い、真撰組同士を争わせた張本人だったこと。そしてまた何か企んでいること。

坂本はじつと黙りこみ、少し間をあげたあと口を開いた。

「そうか……そんなことがあったんじゃない……それとちいっと聞いた話なんだが……その“春雨”が手を組んだ部隊が第七師団らしいんじゃないけえ」

それを聞いた三人は絶句した。なぜなら、春雨の中で最強の部隊であるからでその団長が晋助とあっているからだ。

「オイオイ……よりによってなんで神楽の兄貴のいるところなんだよ?」

「恐らく銀時のあの強さに惹かれたのであろう。」

晋助は驚きながらも疑問に思い、桂は冷静に答えた。

「そついやあ、オメーらも伝えたい事があるって言ってなかったか?……流れるに嫌な感じしかしねーけどな」

しかめっつらしながら桂・銀次に聞いた。

「それなんだが、あいつ……銀時が江戸にきてるらしい。京で何か得体のしれないものを造り、運んだとの情報があった。」

「兄貴は他にも何かを開発させてるらしい。近々、動いてくるかもしれねーな。ってか動いてるかもな。」

晋助・坂本は黙って話を聞いていたが“まさか江戸に着てる”とは思わなかっただろう。

「用心に越したことはないだろう。それよりせつかく四人も揃ってるんだ、飲まないか？」

「おお、わしも持ってきたところじゃきー。久々に飲もうぜよ。」

どこからか酒を持ってきた桂・坂本に二人は笑い

「「それもそーだな。」」

と言った。それはもう朝まで騒ぎ、帰ってきた新八、神楽に叩き起こされたのは言うまでもない。

「フン、呑気なもんだねー。かつての英雄が揃いも揃ってこの様だあ、笑えるぜ。まあ、時期に奈落に落としてから仲間に引きずりこまねーとつまんねーからなあ。」

“楽しみだあ”と不気味に笑って万事屋の近くを歩いているのは…
笠を深く被って腰に未完成品の闇桜をもっている、鬼兵隊の副総督、
桐生藤間だった。

4、戦友は集まる場所は一緒（後書き）

だんだんグダグダになってきたかも…（笑）

次回「絆は何度斬ろうとしても絶対に斬れない」

ついに鬼兵隊始動！！（一部）

最初の祭はとんでもなくでかくするつもりです。

5、絆は何度斬ろうとも、絶対に斬れない。(前書き)

長いので、何話か分けて書くことにしました。たぶん二話くらいです。

あと、銀時にキセルつけるの、忘れてた!!

5、絆は何度斬ろうとも、絶対に斬れない。

あれから銀次は真撰組に帰り、近藤たちを呼んだ。

「どうしたんだ銀次？珍しいな。お前から呼び出すなんて。」
珍しそうに言う近藤に土方、沖田も同意する。

「実はな……兄貴が鬼兵隊引き連れて江戸のどこかに潜んでるらしい。」

「「「！！！！！！」」」

とんでもない衝撃が三人を襲った。

「まじかよ……………」

「こりゃあ近々とんでもないことがおきやすぜ？」

土方と沖田は冷や汗をかきながら言うが、近藤は

「銀次……………お前大丈夫か？恐らくやつは俺たちより、おまえら戦友を狙ってくるだろ？」

銀次の心配をしていた。

「こっちの心配はねーって言えば嘘になるけどな。俺はともかく、あいつらは大丈夫だろ。恐らく兄貴は俺達をあっち側に引き戻そうとしてるんだろ。」

「そうはさせん！！！」

と近藤は大きく声をあげた。

「過去はどうであれ、万事屋とお前はもう俺達の仲間なんだ！！！」

「なんで俺なんだよ！？！？もつと強いやつ狙えばいいじゃねーか
！！！」

「どうせ、ここでじゃ録なことしてねーんだろ？俺には今強弱なん
ざ関係ねえ、血が見たいだけさ。さて、話はここまでだ。」
と言って藤間はザシユツと横に薙ぎ払った。

ズシャアアアアアと浪人の体は真つ二つになり、地面に転がった。

「まだまだ足りねーな……なあ？闇桜あ？」

血に濡れたどす黒い刀は闇夜に不気味に映られていた。

そう…事は江戸だけじゃなく、地下の吉原までに広がっていたのだ
った。

ところ変わって万事屋では、三人で相変わらずな日々を送っていた。

「晋助さん、そろそろ依頼がこないと今月やばいですよ。」と新八。

「そうネ！！！何日酢昆布食べてないと思ってるアルかぁ！！！！！」
「と神樂が晋助の隣に来て言う。」

「うつせーなあ、面倒くせーなあ。代わりに行ってこいよお。」

面倒くさそうな顔で晋助は言ったのに新八は「はあ…あんだんだ
け面倒くさいんだよ。」と呆れながら呟いた。すると、タイミング
よくインターホンが鳴った。

「新八い、お前が行けよ。」

「駄メガネにできるのはそれくらいネ！」

「役目忘れんなよ。これだから駄メガネは…いつまでたっても駄メ
ガネなんだよお。」

「そうアル！！！」

二人に対して新八は「駄メガネなめんなあ！！！！いや、認めてない
からね！？はあ、行けばいいんでしょ！？行けば！」と切れ口調か
らだんだん呆れながら玄関に向かい、戸を開けると

「どちらさまですって……月詠さん！？」

「よお、久しぶりじゃな。」吉原自警団『百華』^{ひゃっか}頭領、月詠がキセ
ルを吹かして立っていた。

「ツツキーアル！！！久しぶりだナ！！！」いつの間にか神樂も玄
関にきていた。

「ああ。高杉おるか？」

「あつはい、いますよ。呼んできますね。」

月詠が頷いたの見たあと、「晋助さん。月詠さん来てますよ。」と晋助のいる居間のほうに叫んだ。

「ああ？何の用だあ？厄介事なら勘弁してくれや。」

と嫌そうな顔で玄関に向かい、言い放ったが新八から「晋助さん！今月やばいんですから！！！！どんなのでも頼みますよ！」と言われ「はあ……」とため息をついた。

「んで？テメーが地上にきたってこたあ、吉原がどうかしたのかあ？」

仕方なく話を聞く態勢を取り、月詠に聞いた。

「んむ、最近なんじゃが吉原で浪人が次々と斬り殺されているんじや。真つ二つに斬られたり、首だけ斬られ、晒されたりと酷い死にかたでな」

苦い顔で月詠が話すと晋助は顔を歪ませる。

「オイオイ、今度はあつちでも辻斬りが起こってんのかよ。」

「でも、なんで吉原で起きてるんですか？」

新八が聞くと、月詠は首を横に振り、

「それはわからん。ただそれを起こしてる連中がわかった。」

ピクッと晋助が反応した。その様子に三人は首を傾げたが、そのま
ま話を進めた。

「その連中は何て名前アルか？」

「その連中はたしか…鬼兵隊とか……って高杉！？」

「「！？」」

月詠が言ってる途中で晋助が外にもの凄い速さで駆け出したので、三人は驚くしかなかった。

「た、大変ですよ！！もし鬼兵隊だったらやばいことになりますよ！！！」

新八が汗っていると、

「どういうことだ！？」

月詠が声を荒げた。

「鬼兵隊は地上では有名なテロリストで、過激派武装集団アル！！そのリーダーは「白夜叉」で晋ちゃんの元戦友アルよ！！！」

「なっ！？」

月詠は驚いていた白夜叉という名前は攘夷戦争で有名であるため、知っていたが、まさかあの高杉晋助と元とは言え、戦友だったとは知らなかった。

「とりあえず、追い掛けましょう！！！」

「ああ／うん！！！」

新八の声で三人とも外に駆け出すがその瞬間誰かに声かけられた。

「おつ新八君達じゃないか！」

そこにいたのは

「近藤さん、土方さん、沖田さん、銀次さん！」

近藤、土方、沖田、銀次の四人だった。

「そちらの別品さんは誰ですかい？」

「わっちは吉原自警団頭領の月詠じゃ。」

沖田の問いに月詠が丁寧に応えた。

「つて、紹介してる場合じゃないですよ！！急がないと！」

新八が汗ってるのと、もう一人いないことに四人は気づき、銀次が聞いてきた。

「そついやあ、何で急いでんだ？高杉はどこだ？」

「吉原で鬼兵隊が動いたんですよ！！！晋助さんは走って行っちゃいましたよ！」

「……何！？」「……」

と四人同時に声を出し、先に銀次が「チッ」と舌打ちして走りだした。

「オイ、銀次待て！！！」

「言うて場合じゃねーや、土方さん！！！！俺らも早く行きやしよーぜ！！！！！！」

近藤、土方、沖田、新八、神楽、月詠は銀次の跡を追った。

く地下吉原桃源郷く

「きゃあああああああ！……！！！」

「何が起きてるんだ！……！！！」

「逃げろおおおおお！……！！……！！……！！！」

ドオオオオン！……！！……！！……！！

賑やかであつた吉原が一辺にして火の海と化していた。

「母ちゃん！……これじゃあ水いくつあつても足りないよ！……！！！」

「清太落ち着きな！……とりあえずある分だけぶち撒けな！……！！！」

そんな中、百華と清太、日輪は消火活動を行っている。

日輪が百華、清太を指示して散らばしたあと、それを狙ってたかのように男、藤間が不気味に笑いながら歩いてきた。

「フハハハハ、なあ日輪さんとやらよお。んなことしても無駄っつうことわかってねーみてえだな」

「やってみなきゃわからないさ、私達今までどんな苦難にも乗りこえてきたんだ、何度踏み潰されそうとも何度でも立ち上がる。私達の場所は私達で守る！！あんたにはこの吉原は潰せないよ！！！！」

日輪の目は決して死んでなかった。

「フン、まあほざいてろや。どんな魂強くても人間は脆いんだぜえ。あんたは先に逝って吉原の終焉を見届けるんだな」と言って閻桜を振り落とす。日輪は目を潰つた。

「日輪様あああああ！！！！！！」

「母ちゃあああああん！！！！！！」

ガキイイイイン

痛みがこらず、目をあけると、そこには刀と刀…嫌、刀と木刀がぶつかり合っていた。そして見覚えのある男。左目には包帯、女物のような服を着た…

「晋さん……！！」

高杉晋助がいた。

「オヤオヤ、誰か思ったら黑夜叉じゃねーか。ククッ」

「……テメエか、吉原で辻斬りを始めたのも、火の海にしたのも。」

晋助は右目で藤間に睨みつける。

「こえーなあ。確かに辻斬りは俺だよ？ただ火の海にしたのは……
銀時だよ？」

「あの野郎…きてやがるのか！！！」

「いや、指示してるだけだぜ。来てるのは河上と第七師団くらいかねえ。」

「！！！」

晋助は目を見開いた。まさかもう春雨とともに動いてるとは思わなかった。

「俺達あ、たしかに江戸に来た。だがなあ江戸だけじゃつまんだよ、どうせならお前らが行ったところでやっちまおうって訳だ。」

「第七師団も団長ですら、あの人に頭が上がりなくなっちまってたなあ。ああ今回は団長と付き添いは来てねーぜ？そっちはそろそろ来てるみたいだなあ」

晋助は藤間が言ったあと後ろを振り返った。

「テメーら!!!」

近藤、土方、沖田、銀次、新八、神楽、月詠がいた。

「万事屋あ!!!!こりゃあ一体……」

「日輪!!!!大丈夫か!?!」

「ええ。大丈夫よ。」

土方が目の中の出来事に啞然とし、月詠は日輪の姿を見た途端、近寄った。

「狗どもも嗅ぎ付けてきたか。やっぱりお前もいたんだな、第二の白夜叉さんよお。」

銀次を見ながらニヤリと藤間は笑った。

吉原組はただ驚くしかなかった。

「テメーらは俺、高杉、桂、辰馬が目的なんだろうが!!!!わざわざ俺たちをそっち側に引き戻すためだけにしたってーのか!?!」

「フツ、黑夜叉、第二の白夜叉、狂乱の貴公子、快援隊長……そっち側にいてはいけないんだよ。どうしてこんな腐った世界でこのうと生きてられるんだ?特に一番憎んでるはずのお前がなんでそっちにいるんだ?黑夜叉……嫌、高杉晋助よお。」

日輪、清太、啞然とした。

「主が黑夜叉……」

月詠は小さく呟いた。

「確かにあの人を奪ったこの世界はぶっ潰したいほど憎い。だが、いくら憎んでもあの人は帰ってこない、復讐なんてなあ無意味なん

だよ。それにな、憎むと同時にこいつらと会って、この世界も悪くねえなっと思っちゃまった。だから何度きたって俺達の絆は崩れやしねえ、何度壊そうとも俺達がいる限り、壊れやしねえ!!!!」

晋助は鋭い黒夜叉の眼で睨み、木刀を構えた。
銀次たちもそれぞれの武器を構える。

「あーあ、全員敵になっちゃったよ。わりいな銀時イ。…河上、あとは好きにするんだな……」

「承知した」

藤間が諦めたようにどこから出てきた万斎に告げ、去ろうとするが、銀次に止められた。

「待ちやがれ!!!! テメーは何物なんだよ!？」

藤間は怪しげに笑い答えた。

「俺か？俺は鬼兵隊副総督、桐生藤間だ。じゃあ、せいぜいこの世界で足掻いてるんだな。」

「オイ!!!!」

「主らの相手は拙者達でござる。

立ち去っていくのを再びとめようとするが、万斎と鬼兵隊の連中と春雨の天人達に囲まれた。

晋助は舌打ちをして新八のほうを向いた。

「…………やるしかねえよーだな…………新八!!!! オメーは百華たちとともに日輪と清太を連れて隠れる!!!!」

「でもっ！！！」

新八は怠った。それ見て晋助は

「新八、オメーはもう弱くなんかねえ、最初るときと全然強くなっ
たじゃねーか。これはオメーにしかできないことなんだ、頼むぜ。」
優しく新八の頭を撫で、笑った。

「はい！！！！全力で日輪さんと清太くんを守ります！！！！二人とも
行きましょう！！！！！！」

と二人を連れて百華とともに走った。

「ちつと数こつち足らねえな。」

「何言つてんだよ。俺達あ、黑夜叉と第二の白夜叉だぜえ？こんな
ん攘夷戦争と比べりゃ大したことねーだろーよ。」

銀次は続けて「あと零番隊のやつらも呼んであるからなあ」と言っ
た瞬間に

「隊長！！！！！！ご無事ですかぁ！！！！！！」

隊士達の声が聞こえてきた。

「来るのはえーなあ。よし、高杉イ！！！！！！俺あ、先突っ込んで
行くぜ！！！！」

「うおおおおお！！！！！！」と隊士達とともに敵に突っ込んでい
った。

「さーて、俺達も行くか。神楽！存分に暴れろよ！！」

「おうネ!!!」

「久しぶりの喧嘩だぜえ」

「調度、鈍ってたところだったんでさあ。」

「これ以上好きにはさせれないからな!!!!!!」

上から高杉、神楽、土方、沖田、近藤の順に言ったあと敵の方に突っ込んで行った。

「一方の新八達」

「ふう、ここまで来れば大丈夫かな...?」

裏道まで来たあと少し安心したように新八は言った。

「皆さん、少し休みましょうか。」

全員が頷き賛同した。

すると前方から「よお…ククククツ…また会ったなあ」と声が聞こえてきた。

暗闇でまだ姿が見えない。

「誰ですか!？」

新八、百華達は警戒心を強める。

「俺のこと忘れたのかあ？」

近付いてきたので、今度は姿が見えたが、新八は見開いた。

「あ、あなたは!!!!!!」

そこには紅桜で会った『白夜叉』坂田銀時がキセルを吹かしていた。

5、絆は何度斬ろうとも、絶対に斬れない。(後書き)

夜勤やらなにやらで遅くなりました。

次回「今も昔も伝説には変わらない」です。

わかると思いますが、あの方々が主に活躍しますね。

新八と銀時んところはどうやるか考え中です(笑)

6、今も昔も伝説には変わらない。（前書き）

さっき投稿しましたが、少し書き直しました。

ああ……文才欲しい…。

藤間の闇桜は完全なってから絡ませます（笑）

6、今も昔も伝説には変わりない。

銀次を始め、全員突撃したあとがすごかった。

銀次と晋助の剣技はまさに我流、自由自在に刀、木刀を操り敵を斬り倒していく。

「どけやあああ!!!」

「雑魚はとつと家に帰って引きこもってろお!!!」

と雄叫びをあげながら進むが、後ろから「死ねエエエエエエエ!!!」と銀次目掛けて斬り掛かってきた。

ザシュツ

天人が完全に斬ったのは数本の銀髪で、当の本人はいない。当たりを探してると

「テメーが死ねや!!!」

ズシャアアアア

後ろにすでに周りこんでいた銀次が横に斬りはらった。

「オウオウ、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆ける姿はまさしく夜叉つてかあ?」

といいつつ、銀次と似たような感じで敵を吹っ飛ばしている。脇から晋助が茶化すのに切れて

「うつせー!!!!!!テメーこそその木刀、血に塗れてんぞお!!!
!つーかそれテメーも似たようなこと言われてんだろーが!!!!」

「こりゃあアレだ、さっきトマトジュース零れて染み込んだんだよ。」

「んなグロテスクなトマトジュースなんかねーだろおがぁ！！！！
！高杉がトマトジュース！？それ自体ありえねーよ！！！！腐れ甘党が！！！！」

これには晋助も切れた。

「喧嘩売ってんのかゴラァ！！！！テメーも甘党だろうがぁ！！！！！！」

とかいいながら天人達を次々と倒していく。

「邪魔だアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

銀次と晋助のコンビは抜群だった。後ろの敵を銀次、前の敵を晋助といったようにお互い背を併せ守るように戦う。

「なあ、銀次。テメーとこうやって戦うの久々だなあ。」

「そうだな。こうゆうのも悪くねえな」

話すことができるほど余裕で爽やかな顔でさらに、一言。「楽しむことが出来るほど余裕で爽やかな顔でさらに、一言。」「楽しいショーの始まりだあ」「といてなお、激しく暴れている。零番隊も銀次に鍛えられているため、隊長並みに強い。その姿をみて真撰組三人は思った。

「俺達、いらなくね？」

だが、近藤の力強い豪快な剣裁きと土方、沖田の迅速な剣技でそうとう倒してる。それ以上をも上回るほど倒しまくってる二人に啞然としてる。

「ホアチャアアア！！！！当たり前ネ！！！！晋ちゃんはお前らと違うンダヨ！」

蹴り、殴り、傘で乱射など神楽も尋常じゃないくらいの強さで倒しながら言う。

「全く何をしとるんじゃ、主らは。」

月詠も四人に呆れながらクナイを使った素早い攻撃で倒す。

後ろをとられても素早い身のこなしで避け、クナイを放つ。さすが「死神大夫」と恐れられてるほどである。

それを少し離れていた場所で見っていた万斎は…

「これはこれは……もう手に終えんな。拙者が出てもどうにもならんでござろう。藤間も行っだし、銀時は……来てるであろうな。だが、引き際でござるな。」

諦めたように呟いた。さらには「帰ったら、殺されるな」と付け足し、その場から部下とともに立ち去り、船へと戻っていった。

黒夜叉、第二の白夜叉、夜兔族、真撰組局長、鬼の副長、真撰組最強の一番隊隊長、死神大夫が揃っているのだから仕方ないといえは仕方ないだろう。

こうしてるうちにこちらは幕を下ろした。

「オイ、テメーら無事か？」

ふうつと一息をついてから晋助は無事であるか確認した。

「晋ちゃん、私達を誰だと思ってるネ？」

神楽をはじめ、全員が無事に揃っていた。

「フッ言うまでもなかったな。」

と晋助は笑いさらに

「あとは新八達を探さないとな。」と言って、晋助達は走り出した。

「なんで……あなたがここに!？」

新八は目の前にいる恐怖と絶望しか与えない男…銀時に震えながら聞いた。百華や日輪、清太も尋常じゃない殺気に震えが止まらない。

「これが……伝説の白夜叉……」

日輪は小さな声で言った。

「ククッなに、指示するだけじゃあ、つまらなくてなア。ついつい来ちまったよ。だがあつちはもう、お開きみたいだなア。」

こちらに近寄りながら、銀時は言った。新八達は後ずさる。

「だがなア、自分の中にいる獣がうずうずしてんだよ。血が見えてエ…ってなア。テメーら雑魚が死んでいくのが見たくなくなったわけよオ。」

鞘から刀を抜き、更に近寄るが「雑魚じゃない」と上から声が聞こえたと思ったら、飛び降りそのまま斬りかかってきた。

（この気配は…！）

と何かに気づいた時、

ガキイイイイイン！！！！！！

と刀のぶつかり合う音が響いた。

飛び掛かった男が着地しこう告げた。

「桂だ」

その男は桂だった。

「桂さん！！！」

新八はありったけの声をだして叫んだ。

「おお、新八くん。無事で何よりだ。」

桂は安心したように言った。

「桂って……もしかして狂乱の貴公子？」
と日輪は驚きながら聞いた。

「むっ、俺の事知ってるのか？」
桂は意外そうな顔で言った。

吉原組はただ驚くしかなかった。かつての伝説が四人一氣にこんな形で見れるとは思わなかったから。

「ククククツ…ツラア、まさかお前も来てたとはなあ…紅桜以来だなア。」

「銀時、貴様も堕ちたな。俺の気配も感じ取れないとは…それにツラじゃない桂だ！」

銀時は愉快そうに、桂は半ば呆れて言った。

「それより…桂さん！！！！なんでここにいますか！？」

思わない人物の登場に新八は驚いた。

「いや、お前達の所に寄ろうとしたんだが、何やら狗どもと走っていくのが見えてな。気になってきてみたが、まさか…こんなことになつてたとはな…」

「あんただんだけ暇なんですか！？攘夷浪士なんですか！？ホントに！！！！」

桂の答に新八はツツコミだす。

「ククツ相変わらず見てえだなア。お前の天然は」

「お前は…あの優しい顔してたのに随分変わったな…昔はあんなに銀次と仲間を想ってたんだがな…」

「それ以上言うんじゃないやねえ…あいつ、銀次は元気か？」

呆れ気味だったが、桂の答により不機嫌そうに聞いた。

「貴様のその弟思いは変わらんのだな。あいつは元気にしてるぞ。あいつはあいつらしく信念を貫き通してるみたいだしな。」

銀時の昔と変わらないところにフツと笑った。

「なあ銀時？もうやめることはできないのか？前も言ったが、人を巻き込まずに江戸を変える方法があるはずだと。……俺達はまた前の五人に戻ることはできないのか？」

桂は悲しそうな顔で銀時を見つめる。

「ククククツ……もう何もかも遅いんだよ。前も言ったがなあ。オレア、この世界でのうのうと生きてるやつらが許せないんだよ。どうしてあの人を殺したやつらがのうのうと支配してる！？オレア、それが腹ただしくて仕方ねえーだよ……」

「銀時……」

どこか遠くを見つめながら話す銀時に返せない桂。

そして黙って聞いていた新八達は息を飲む。

「まあ……あいつが元気ならいいんだよ。たった一人の弟だ……俺のこと兄貴ともう思ってたねーかもしれねーがな」

ククツと笑っているがどこか悲しい顔をしていた。

それに対して桂は

「何を言っておる。あいつだってお前を兄貴とちゃんと思ってるのだぞ?……まったく、弟に弱いところも変わらん。貴様も」

「チツ……相変わらずうぜーなアテメーは。まあいい。そろそろうるせーのが来るから今回は引く。じゃーな。今度邪魔したら斬るぜ。」
と桂に言ったあと、消えていった。

新八達はあの一番危険な過激攘夷浪士の意外な一面を知り、啞然となる。

新八はあることに気づく。

「あれ?桂さんもやばいんじゃないですか?土方さん達が来ますよ?」

「ぬ?そうだったな。俺もそろそろ行くか。ではまたな。」
と桂もその場を立ち去っていった。

しばらくして「テメーら、大丈夫だったか!!!」と叫び声が聞こえて振り返ると、晋助達がこちらに走ってきた。

「晋助さん!」

「おう。無事みたいだな。」
すると、グウウウーと音がしたので鳴ったところを見ると……

「晋ちゃあああん……お腹空いたアル。」
神楽が弱々しく言った。

「そついやあ、そーだな。」と晋助が言つと日輪が答えた。

「まだいくつか大丈夫なところがあつたからそこでみんなで食べない？真撰組のみなさんも一緒に。」

「ありがとうございます。そうしてもらつと助かりますな。」
近藤の言葉に全員賛同する。

「んじゃあ、後処理したら宴会だな」

と言葉と同時に後処理が開始された。

くとある港

銀時は一人キセルを吹かして歩いていると巨大な船が見えてきた。

「銀時様、こつちッス」

船の中からまた子が出てきたのでそちらに向かった。

「お疲れ様ッス、藤間様と万斎のヤローも帰って来てるッス。」

とまた子がいつもどおりに言う

「ああ、ちよっくら外で吸ってくらあ。」

と言ってまた子の頭を撫でるといふ、普段絶対しないことをしたことにより驚いて、また子は顔を真っ赤に染める。

船はさらに出発し、銀時は吹かしながら

「もう戻ることも、変わることもねーよ」
と呟いたのだった…。

6、今も昔も伝説には変わらない。（後書き）

次は、宴会ですねーあのキャラが崩壊しますよー（笑）
次回「酒と女のワンセットは気をつける」ですよー（笑）

7、酒と女のワンセットは気をつける。(前書き)

やっと書けた♪

久しぶりの更新(笑)

7、酒と女のワンセットは気をつける。

鬼兵隊の襲撃から退けて、吉原の後始末を終えた吉原組、万事屋、真撰組メンバーは無事だった場所遊郭『牡丹灯楼』というところに向かつていった。

「いらっしやいませ〜吉原の救世主様あ〜／＼／」

近くになると遊女達が晋助のもとへ向かっていった。晋助

「おう。なんかわりーなあ。またタダでしてくれるんだって？」

日輪

「ええ。晋さんには三回も助けられたからそれくらいのサービスはしないと。遠慮しないで飲んでね。」

晋助が遠慮がちに言うと言輪が笑顔でそう答える。

それを見ていた真撰組三人。

近藤

「なあなんで万事屋はあんなに歓迎されてるんだ？モテるのか？俺と同じだと思ってたのに！」

沖田

「いやあ、そりゃあ違いますぜ。旦那はあんな格好だし、どっかの誰かさんと同じ目付き悪いだけで近寄りがたいんですよ。決してモテないとは限りやせん。」

土方

「おい、総悟。どつかの誰かって俺のことか？まあ…確かに言えるかもな。」

近藤は何やら嘆いているのに沖田が答える。それにつっかかる土方。それに銀次が呆れてると神楽が話し掛けてきた。

神楽

「ねーねー銀ちゃん。」

銀次

「んあ？って銀ちゃんって……まあいいけど、どうしたんだ？チャイナ？」

神楽

「神楽アル！！晋ちゃんってモテたアルか？」

銀次にチャイナと呼ばれ、少し不機嫌になりながら聞いてきた。

銀次

「まあ沖田くんが言ってるような感じで高杉自信あんなだからな……まああれがなきゃモテンじゃね？」

神楽

「……………そうアルか。」

ちよつと神楽の沈んだ声を聞いて銀次はニヤリと笑った。

銀次

「何？遊女達があんな簡単に高杉に近付いてるから妬いてんのか？お前、あいつにかなり懷いてんもんな。」

神楽

「／／／違うネ！そんなんじゃないアル！／／」

慌てながら答えているのでますますニヤニヤしながら

銀次

「ウブだね。てかなんであいつ救世主なんだ？」

神楽は真っ赤になって何も言えなかった。話しかわってそれに答えようとしたが、真撰組三人も混ざってきた。

神楽

「晋ちゃんは過去二回吉原の危機を救ったネ！だからああ呼ばれているアルヨ！私たちもだけどナ！！！」

神楽の答えに四人は納得する。

話をしてると一人の遊女が「着きましたので、お部屋を御案内いたします。」と言われ、晋助達はついていった。

部屋を案内されて中を見ると、晋助達が入るには充分なほど広く、テーブルの上にはものすごい豪華な料理と酒やジュースが並んでいた。

神楽

「キヤホオオオオイ！！！！！！スゲーアル！！！」

新八

「そこまでしてもらって……ホントにいいんですか？」

日輪

「いいのよ。あなた達には本当に感謝してるの。だから存分に食べて？」

はしゃいでる神楽に新八が問うと、日輪が笑ってそう答えた。それを聞いて神楽はもうダッシュで料理のほうに走っていった。それを見ていた晋助達は苦笑してテーブルに向かっていった。

そして適当に席につき、適当に始めようとしたが、近藤がいきなり席を立ち「えゝ今回は本当に頑張った。みんなお疲れ！乾杯ゝ！」などと言い、それを来に宴会が始まった。

晋助

「なんでゴリラがしてんだよ……」

晋助が若干呆れていたが、日輪に酒を注がれる。

日輪

「そんなこと言わずに、晋さんも遠慮しないで飲んで？」

晋助

「ああ。」

吉原の太陽に注がれご機嫌の為、一気に飲みほす。

それからというものの、部屋の中は凄まじくなっていた。神楽はものすごい勢いで食べており、新八はすでにダウン寸前にデロデロになつて倒れている。さらに近藤は恒例の素っ裸になり召集がつかない土方、沖田は呆れながらもチビチビと飲んでいた。銀次はというと月詠に絡んでいた。

銀次

「そののねーちゃんも飲めや。」

月詠

「？わつちのことか？別に構わんが。」

銀次に注がれ、飲もうとしたが清太がそれをみて「月詠姉え、酒はダメだつて！！」と叫んだが、すでに遅かった。

月詠が頭に？をつけながら飲んでしまった。

更に銀次が「いける口じゃねーか」とまた注ぎ込み、自分も飲もうとしたが、声がしたので月詠を見た。

月詠

「……………注げ」

銀次

「んあ？」

小さな声だつたためよく聞き取れず間抜けな声を出すと次の瞬間

月詠

「注げと言ってるんじゃないああああああ……！！！！！！！！！！」

ガシヤヤアアアアン！！！！

銀次

「ギヤアアアアアアアアアア！！！！」

酒瓶で銀次の頭に叩きつけた。

「テメー！隊長に何やってんだああああ！！！！」

零番隊の連中が叫ぶが……

月詠

「あん？やんのかゴラア。」

「すんませんでしたああああああ！！！！！！！！！！」

月詠のドスの効いた声を聞き、全員が土下座した。

万事屋、日輪、清太以外啞然とする。

近藤はまだ素っ裸で踊っていたが月詠がそれを見てそちらに走って行き

月詠

「何でこんなところにゴリラがいるんじゃないアアアア！！！！！！！！！！」

近藤

「ぶべらあああああ！！！！」

近藤に飛び蹴りを食らわしたおかげで近藤は吹っ飛んで気絶した。

月詠は再び銀次のほうに向かった。

月詠

「何早々と潰れてるんだゴラア。まだ夜はこれからなんだから飲めや。」

と言って銀次の口に無理矢理酒を突っ込む。

銀次

「あれ？もう意識がないかなあ……お嬢さん俺らいつから飲んでましたっけ？ダメだ帰っていいですか？」

意識朦朧としながらいう銀次にさらに機嫌を悪くした月詠。

「ああ？さつき飲み始めただろーが。私の注いだ酒が飲めねーのか？あん！？」

銀次

「いやいやいや、滅相もございません！！お嬢さんとはどこまでもお供しますよー」

冷や汗だらだら銀次に土方らは顔を引き攣らせた。

土方

「オイ……なんだ？アレは……」

新八

「あははは……月詠さんはかなり酒を弱いんです。以前、僕達っていつかとくに晋助さんが酷い目にあわされましたから。」

沖田

「ありゃあ、弱いつていうレベルじゃねーですぜ。酒でとんでもねー未知なる力を抽出してまさあ。」

三人が話していると清太と日輪の会話も聞こえてきた。

清太

「母ちゃん！月詠姉え…また！」

日輪

「ウフフフ♪月詠ったらまたあんな女の子らしくなっちゃって……良かった♪」

全員

「どこがああああああ！？」

言ってる間に銀次と月詠はゲームというか……一方的に月詠にぼこられていた。

新八

「てかあんたら助けに行かなくていいんですか！？晋助さんの時より酷いですよ！これは！」

新八はそう言うが土方がどこか遠くを見つめながらいった。

土方

「時には黙って見守ってやるってのも大事なんだぜ？」

新八

「どんだけだけ薄情なんだアンタは……！」

土方の答えに怒鳴っていると月詠がこつちをみた。

月詠

「お前らも私の遊びに混ざれや。3数えるうちに来ないと殺すから。ハイ1、2……」

全員が愕然とした。

月詠はさらに襖のほうをみていった。

月詠

「そこのお前らも逃げたら……わかってんだろっな？」

ドスの効いた声で言うと二人……晋助と神楽は冷や汗をかいて返事した。

晋助・神楽

「……………ハイ」

それからもうみんなボロボロになりながらも盛り上がった。約一名を残して…

近藤

「……………。」

近藤はまだ素っ裸で気絶しているのを放置して…（笑）

7、酒と女のワンセットは気をつける。(後書き)

次回「やっぱりいつものおりの日常が一番幸せ。」です。

8、やっぱりいつものおりの日常が一番幸せ。(前書き)

ほのぼの……なのか？まあ自分なりにそついう感じにしました(笑)

8、やっぱりいつもどおりの日常が一番幸せ。

あのあと晋助達はボロボロになりながらも江戸・歌舞伎町に帰ってきた。

新八

「はあ……やっと帰ってこれたよ……。」

晋助

「最後の最後まで散々な目にあっちまったぜ……。」

神楽

「まったくネ!!さすがに銀ちゃんも懲りたデシヨ?」

銀次

「ああ………そーだな。」

銀次のやつれた顔をみて晋助らも苦笑した。

土方

「とりあえず俺達は屯所に帰るぜ。」

沖田

「じゃあまた何かあった時は頼みませう。」

銀次

「じゃーな。」

と言って帰っていったが、新八は「あれ？なんか足りないような…」と疑問に思ったがあまり気にせず、二人と一緒に万事屋に帰っていった。

そして万事屋に着き、中に入っていった。

新八

「なんか何ヶ月も帰ってきてない気分になっちゃってましたよ…」

晋助

「まあな実際一日しかたってねえし。」

とため息をついていると「ワン！」と元気い声で鳴いた定春がいた。それに気付いた神楽が「定春ウウウウウウ！！！！！！！」と定春向かっていき抱き着いた。尻尾を大きく振り、とても嬉しそうだ。

それを見ていた晋助達は微笑して

新八

「帰ってきたんですね。」

晋助

「ああ…」

安心しきった顔で呟いた。

すると、ピンポンとなったのででていこうとしたが、聞き慣れた声

が聞こえてピタッと止まった。

たま

「お登勢様により家賃の回収にまいりました。晋助様いるのはわかっています。？秒以内に出ないと部屋ごと吹き飛ばします。」

3、2と聞こえてきたので神楽も含め冷や汗をかき、逃げるにも逃げられない。

そして1と聞こえた瞬間

ドカアアアアン！！！！

「ぎゃああああああ！！！！！！！！！！」

たまのほつきから火を噴いて万事屋を破壊し、三人の悲鳴が江戸中に響いた。

そのころ屯所に到着した銀次達は……

銀次

「屯所がこんなに遠いと思ったの初めてだよ……」

沖田

「どんまいでさあ銀次さん。チツ土方が犠牲になれば良かったのに。」

銀次・沖田

「全部テメーのせいだ。土方。」

沖田は晋助だけではなく、銀次にもそうとう懐いてるため銀次側につく。まあ普段も土方のほうにつくと言うのは絶対にありえないが、土方は額をピクピクしながら「おーし二人とも刀抜けエエエエエ！……………」と怒鳴った……………が効果なし。

銀次

「へえ……………この俺に敵うと思ってんの？副長さん？」

沖田

「銀次さん抜かなくても大丈夫でさあ」

逆に挑発して刀を抜こうとしたが沖田がバズーカを構えてるのを見て、「あっそののほう手っ取り早いな。やっちやえ沖田くん」と機嫌よさそうに言っただけで部屋に戻った。

土方

「てめーら刀なんだと想ってたんだあああああ……！」

と土方が怒鳴った直後ドオオンン！！とバズーカが発射され、飲み込まれた。

だが土方が避けたのをみて「チッ」と沖田が舌打ちしたが、庭のほうで山崎がミントンしてるのを見てニヤリと笑った。

沖田

「土方さん。俺より山崎なんとかしたほういいんじゃないですかい？」

と沖田の指先を見ていると……

土方

「山崎イイイイイイイイイイ！……」

山崎

「あつ副長達おかえりなさ……ってギヤアアアアアアアア」

土方が突進してそのままぼこぼこにされた。

沖田はクククと笑いながら部屋に戻っていった。

だが戻ってる途中なにかを思い出したように呟いた。そして土方、銀次も。

「……あつ近藤さん回収すんの忘れてた。」「」

「吉原」

「これ……どうするでありんすか？頭？」

百華の一人がそういうと頭……月詠がゴリラ……近藤の全裸で転がっているのを見て、困ったように

月詠

「燃えるゴミにでもすてておけ。そのうちに起きて帰るじゃろ」

と何気に酷いこと言ってあとは部下に任せた。

その後復活したゴリラが「トシイ！！総悟！！銀次イ！！！」と全裸で泣きながら叫んで帰っていったのはいつまでもない。

8、やっぱりいつもどおりの日常が一番幸せ。(後書き)

やっぱりゴリラですね(笑)

次回「白き獣には誰も逆らえない」

吉原襲撃前の銀時と神威の手を組んだ経路の話の予定です。

あとまだ先ですが女、男のキャラだすかオリキャラだすか迷ってます……

9、白き獣には誰も逆らえない。(前書き)

予告通り、神威と銀時の手を組む話です♪

9、白き獣には誰も逆らえない。

江戸の遙かに上空で二隻の船が飛んでいた。

一つ目は銀時率いる鬼兵隊の船、二つ目は宇宙海賊《春雨》の宇宙船。

そして鬼兵隊の船に梯はしを繋げて部下数人を引き連れて歩いていく人物がいた。となりに側近もいる。

「団長、今回の件わかってんのか？また鳳仙時みたいにドンパチだけはやめてくれよ？」

と言ったのは金髪で黒いマントに黒い服を着ている阿伏兔。ちなみ左腕はない。

「わかってるって♪総督さんとの仲をよりよくするためデシヨ♪」

とニコニコと笑顔を絶やさないのは第七師団の団長であり、神楽の兄貴である神威。

（あながち間違っちゃあいねえーが……あの顔は絶対にドンパチやるつもりだ……しかも相手はあの男かよ。どーなっても知らねーぞコンチクショー……。）

と神威の顔をみながら心の中で嘆く阿伏兔。

そして船の中に入る前に二人の銀時の部下、また子と武市が待っていた。

また子

「銀時様は奥のほうにいるから案内するッス。」

武市

「こちらですよ。」

二人がそう言った後、先に歩きだしたので神威達はついていった。

神威

「へえー中々広いじゃん♪地球人が造った船も捨てたもんじゃないね阿伏兔。」

阿伏兔

「あーそーですね(ったく人の気も知らずに…はあ…)」

阿伏兔は呑気な神威に参っていた。すると前方に三人いるのに気付き、すでにまた子と武市は三人…銀時、藤間、万斎のほうに向かっていた。

銀時

「よう、待ってたぜ第七師団さん方々よお。」

銀時が声をかけたあと少し空気が変わった。

「白夜叉あ！どっいつつもりだ！よくも仲間殺しといって俺達を呼ぶとはなあ！…！」

と斬りかかろうとする部下を神威がとめる。

そう、まだ戦争時に仲間を銀時に殺されて恨みをもっている奴らも少なくはない。

また子も武器を構えたが、銀時に止められた。

銀時

「ククッそりゃあ悪い事したなあ。だが戦争なんだぜ？敵とわかれ
ば構わずぶった斬る。テメーらだってそうだろうが。仲間たあ甘え
た考えは通用しねーぜ戦争はよお」

暴れだした部下を殺気で黙らせた銀時。

銀時

「ところでこっちにきたってこたあ答は出たんだろう？団長さん？」

神威

「うん、答は出たよ。そちらに着くよ。ただね…こつも総督さんに
反乱してくる部下もいるし…その代表として相手してくれないかな
♪」

阿伏兔

「（やっぱこつなるのかよ…）」

予想通りの展開にため息を着く阿伏兔。

銀時

「クククククッハハハハハッ面白エなお前。高杉んどこにいる
妹と正反対だなあ。」

狂ったように笑っていう銀時に神威が答える。

神威

「あんなもろい肉体と家族だなんだくらないしがらみに捕われるような脆弱な精神を持つ妹なんて興味ないね。真の強者とは強き肉体と強き魂を兼ね備えた者だ。総督さんだってあの戦友であるお侍さんとは違うんでしょ？それともあの男とおな……」

と言い切る前に銀時が斬り掛かってきた。

ガキインと傘で受け止めると、銀時がギリりと赤い目を光らせて神威を睨む。神威はあまりにも想像を遥かに超える憎悪の目に少し怯む。

銀時

「あいつと同じだあ？一緒にすんじゃねーよ。戦後とともに消えてのうのうと生きて守りきれねーやつらとともに過ごしてる平和ボケなやつと一緒にすんじゃねーよ。だが、そいつの中にいる獣をこっちに引きずりこもうとしてる俺あ、馬鹿かもな。テメー相手なら楽しめそうだあ。」

と言った瞬間、銀時が視界から消えたと同時に神威も消えた。

ガキン、ガキン

ものすごい速さで二人は傘と刀で攻撃している。さらに神威が傘でしかけてくるが銀時はそれを上回る速さで避けて刀でしかける。神威は少しずつであるが押されているので舌打ちをする。

神威

「やつぱり総督さんはすごいね♪だけどそんなくらいじゃあ俺を斬れないよ」

少し力を入れて刀を弾き返し、傘で銀時の心臓目掛けてさつきより早いスピードで突き刺す。だが銀時は「ククッ」と笑い胸に届く前に神威の横に移動していた。

銀時

「さすが夜兎族。一筋縄じゃあいかなえか……って言いたいが、そんなにいいじゃあ俺を殺せないぜ？」

神威

「なっ……！」

横に振り返った時にはもう遅かった。スバツと肩から腹にかけて斜め斬られたあと、蹴り飛ばされドゴオオ……！と音を立てて壁につんこんでいった。

その場にいた阿伏兔含め、部下全員が驚愕した。

まさか自分達の団長である人がこんな人間にやられるとは思ってもしなかった。

阿伏兔

「これが…… 白夜叉の力っ訳かい……」

と小声で呟いた。そして埃が消えたところを見ると、神威が血を流しながら立ち上がる。結構深く斬られているため、少し朦朧としている。

神威

「さすがだね。俺に傷つけるなんて……」と呑気にいいのけるが、少し動揺してそのまま銀時に向かっていく。

だが、銀時は動かない。神威はそのまま傘ではなく、拳で叩き混もつとしたが当たる直前に高くジャンプされ後ろに回られる。

神威もすぐさま振り返りしかけるが

ズシャアアアアア

今度は腹を深く斬られた。

神威が「ぐあああああ……！」と叫ぶ。

ブシイイイイと血が吹き出してなんとかふんばりまた銀時に向かっていく。

神威

「ガアアアアアア……！！！！！！！！！！」

阿伏兔

「団長……もうやめろ……！！」

もう意識朦朧としながら突っ込んでいるため阿伏兔の声が届かない。

銀時

「さすが夜兔だなあ。ククッだがお前みたいなやつ好きだぜえ？」

左右に傘で攻め込む神威を軽く避けながら話す銀時。

銀時

「だがいい加減うぜーのも嫌エーだからもうシメーにするぜ。殺しちゃあ、ビジネスにならねーからこうするぜ。」

刀ではなく、首に肘打ちをかけ、怯んだところに壁のほうに蹴り飛ばす。ドゴオオオ……！と音がして誇りになって見えにくい段々消えて見えてくると神威がまだ立っていた。さすがは夜兔だ。

神威

「ハア……ハア……ハア……」

動こうとしたがガクンと膝から崩れる。

銀時

「対した奴だぜ。んでどうすんだ？敵か？味方？」

神威

「参ったよ……………総督さんには敵わないや……………」

いろんなところから血を流しながらなんとか意識を保ち、神威はもう参った顔をして降参した。

銀時

「クククッ決まりだなあ。オイそいつを医務室にでも連れてけよ。」

武市

「私が案内しますよ。」

と言ってほかの鬼兵隊の部下とともに神威に連れていこうとするが、銀時が口を開く。

銀時

「言つとくが戦友つて甘つちよろいもんじゃねーんだよ、俺達あ。次言ったらテメーのその傘ごとぶった斬るぜ。」

と言って一人部屋に戻っていった。

不気味に言い放った銀時を見て神威は運ばれながらこう思った。

（今の戦いで絶対に斬るつもりだったよね……………）

藤間

「それにしても俺達とんでもねーの見てしまったよ。銀時の戦う姿初めて見たぜ。」

万斎

「拙者もでござる。」

また子

「アタシもっす。」

《絶対に逆らえない…》と三人もかなり冷や汗かいていたが阿伏兔ら第七師団も銀時の恐ろしさを知り、啞然とする。

あれからは吉原襲撃し、仲間を引きずりこもうとしたが失敗し、船に戻って外でキセルを吹かせてると後ろから神威近付いてくる。

神威

「やっぱりうまくいかないもんだね。お侍さん達も齒向かうの好きだね。」

銀時

「フツまあそれがあいつらしい。俺の弟でさえあちら側だからなあ。」

神威は銀時の以外なところを見た。

神威

「弟って真撰組零番隊長だっけ？でもそのほうがいいんじゃない？俺も戦ってみたいし。」

銀時

「好きにしろ。だがあんまり高杉らなめないほうがいいぜ。」

神威

「わかってるよ、俺達はいつ動けばいい？」

呑気に言っただあとそう神威が聞くと銀時はニヤリと笑い

銀時

「別に俺に聞かなくてもすぐ暴れるつもりなんだろ？」
とキセルを吹かしなが言っただ。神威は「わかってるね。」なんて言いながら部屋に戻っていった。

藤間

「んで？どうすんだ？これから」

次に藤間が入ってきた。

銀時

「ククッ闇桜あ調子どうだ？」

藤間

「ああ次期に完成する。あと春雨とともに造ってるアレはまだ時間かかるけどな。」

銀時

「藤間。オメーは闇桜完成したら動け。根絶やしにしよーじゃねーか。」

藤間

「ああ。了解した。俺達も部屋もどるか？」

銀時

「ああ。」

そうして二人は戻っていった。

神威は部屋に入っていくと、そこには阿伏兔がいた。

神威

「阿伏兔、何してるの？」

阿伏兔

「いや、まさか本当にあの男の下に着くなんて思いもしなかったかな。」

不思議そうに神威が聞くと、阿伏兔が答える。

神威

「まさか地球人の下に着くなんて屈辱的だよ。だけどあの男は違う。あの目はもうこの世界が憎い、憎悪しかなかった。それにあんなに俺と戦ってもまだ白い獣をだせてないよ。」

そしてもう一言。「あの男には俺達でも誰も逆らえないよ。」

それを聞いた阿伏兔も頷き、呟いた。

“逆らったら俺達でも一瞬にして殺されるな”
と苦笑した。

白夜叉、坂田銀時。それは第七師団でも敵わない化け物。果たして晋助達はこの男を止めることができるのだろうか……

9、白き獣には誰も逆らえない。（後書き）

少し書き直したけど、戦闘シーンあんまり書けない汗

他にだしてもらいたいキャラいますかね？オリキャラも男しかいねーし（笑）

これ見てる人

キャラ、オリキャラどっちでもいいんで募集してますんでよろしく
お願いします（笑）

次回「再会は派手に」です」

軽く過去&作者妄想がある予定です（笑）

10、再会は派手に（前書き）

過去は松陽先生との出会いだけです。ちなみに銀時・銀次・晋助はすでに一緒にいる設定です（笑）そのうち妄想でいろんな過去を…（笑）

10、再会は派手に

荒れ果てた土地に無数の死体。その死体の上に三人の少年それぞれ座っておにぎりを食べていた。

一人は紫が入った黒髪に緑色の眼で黒い着物を着た少年。

あとの二人は兄弟なので、容姿はほとんど同じ銀髪に天パに紅眼。わかりやすいようにもう一人は真っ白い着物、もう片方二人よりは幼い紺色の着物を着た少年がいた。弟である。

すると、奥のほうから一人灰色がかった長髪の男が歩いてくる。それに気付いた三人は警戒する。

男は気にせず近寄って黒髪の少年の頭に手をおいた。

「^{かばね}屍を喰らう鬼達がでると聞いて来てみれば、君達がそう？また随分とかわいい鬼達がいるものですね」

黒髪の少年は男の手を払い、腰に指していた刀を鞘から抜く。銀髪の少年も弟から守るように抜き、弟のほうは奮えながら刀に手をかける。

「それも屍から剥ぎ取ったのですか。童わらし（達だけで屍の身ぐるみをはぎ、そうして自分達の身を守ってきたんですか。」

男はさらにそんな三人を優しい笑みん浮かべて口を開く。

「^{ひと}だけど、そんな剣もついでりませんよ。他人に怯え、自分達を守るためだけに奮う剣なんてもう捨てちゃいなさい。」

腰に指してある刀に力チャッと手にかけてと三人はより一層戦闘体制をとり、男睨む。だが

ヒョイ

「っ!!」

黒髪の少年にむけて刀をなげる。なんとか左手でよろめきながら受け取るが、後ろにいる兄弟とともに啞然となる。

「くれてあげますよ、私の剣。そいつの本当の使い方を知りたいやついてくるといい。これからはそいつを振るいなさい。」

背を向け、三人からはなれていく。

「敵を斬るためではない、弱き己を斬るために。」

「己を護るのではない、己の魂を護るために。」

歩きながらも少年達に伝えながら遠ざかっていく。

「なあ……どうする?」

ようやく口を開いたのは銀髪の少年……銀時。

「俺はあの人について行きたい!!!!」

次に弟……銀次。

「あの人となら……なんて俺あ思ってる。」

最後に黒髪……晋助。

銀時「俺もだ。」

そう言った途端、銀次はあの男の歩いている方向に向かって走っていった。

あとから晋助と銀時もフツと笑い追い掛けた。

追いついたあと男におんぶされている銀次。そして両脇に挟んで晋助と銀時が男と歩いていった。

すると男は

「そういえば紹介まだでしたね。」と話しかけた。

銀次「俺は坂田銀次！」

銀時「…坂田銀時。」

晋助「…高杉晋助。」

「私は寺子屋を開いている吉田松陽しゅうやうといます。今日からあなた達
は私の大事な生徒です。よろしく願いしますね。」

三人が名乗ったあと男…松陽も紹介した。

「「「はい。」」」

声を揃え返事した。

真撰組の朝は至って静か……ではない。

沖田「死ねエエエエ土方アアアア！！！」

ドツカアアアアアン！！！！

土方「総悟オオオオオ！！！！！！！！テメエエエいい加減にしろオオオオオ！！！！」

この二人のお陰で……。

銀次「はぁ……毎回飽きないねー沖田くんは。」

だるそうに起き上がり、外で騒いでいる二人を見て呆れる。

銀次「（それにしても、懐かしい夢見たなあ……先生……先生
が生きてたらず五人とも離れずにずっと一緒にいたのかな……）」
いつかの晋助と同じように空を見上げて悲しそうな顔をする銀次。

いつのまにか大人しくなっていた土方、沖田はその様子を心配そうに見ていた。

沖田「あれは……いつだか旦那がしてた時と同じ顔でさあ……」

土方「……二人して過去を引きずりこんでるな……銀次……」

するとこっちに気付いた銀次が歩いてきた。

銀次「ちよつくら気分転換に見回り（サボリ）に行つてくらあ。」

とまた二人から遠ざかる。副音声がバツチリ聞こえているが土方は何も言わない。

土方・沖田「……………」

二人は銀次の姿が見えなくなるまで、その寂しそうな背中を見つめた。

なあ銀次、俺達あそんなに頼りないか？お前が何考えてるかなんてしらねーが、俺達あ決して裏切らねー。裏切られてもぜつてえに見捨てたりなんかしねえ。手え差し延べて闇から引きずりだしてやる。何度でもな。お前が俺達を失いたくないのはわかるが俺達だって同じなんだぜ？仲間であり家族だろ？だから……一人で何で抱え込むな……何度でも助けてやる…

土方はタバコを加えながら心の中で呟いた。

銀次は一人歌舞伎町を歩いていた。

銀次「あの夢を見たのはおそらく……ッラと辰馬は見てねーな。俺、高杉、あとは……いや、ないよな。」

一人ぶつぶつと呟いていると、前方から見知った顔がボーッとした感じで歩いていった。

銀次「よお高杉！朝間っからプラプラ歩いて何してんだあ？」

晋助「んあ？銀次か……なんかとても懐かしい夢見たから家に黙っていれねーと思ってな。」

前方にいたのは晋助だった。

銀次「やっぱり高杉も見たのか……ってこたあ見たんだろうな……まったく嫌な予感するぜ。」

晋助「……あいつか……俺もだ。」

どこか遠い目で語る二人。だが、重い空気をはらすかのように銀次が声をかける。

銀次「辛気くせえな。あーだこーだ言う前に腹減らね？特別奢って

やるよ。」

銀次の太っ腹に晋助は「まぢてか！お宅の瞳孔野郎とは違うね〜！」と喜んでいた。

銀次「あんなマヨラーと一緒にすんな。甘いもん食いたいからファミレスでいいだろ？」

晋助「甘いもん食えんならどこでもいいぜ。」

行き先はファミレスに決まり、向かおうとした時、後ろから声をかけられる。

「第二の白夜叉と黑夜叉と見受けられる。」

振り返ると少人数ではあるが傘を被った攘夷浪士と中心に先ほど声をかけたリーダーっぽい浪士がいた。

「元攘夷浪士でありながら幕府の狗に成り下がり、かたやこの町で呑気に暮らしてる裏切り者には我等が天誅を下さん！！」

リーダーっぽい浪士が言ったあと全員が刀を構える。周り人々はこれをみて騒がしくなったり逃げ出したりしている。

晋助「オイオイ、こんな町のど真ん中で」

銀次「刀なんざだしてんじゃねエエエエエエエ！！！！！！！！」

と言いつつ、木刀と真剣で浪士達を倒す。晋助のほうは木刀なので容赦なく叩きのめしているが、銀次は真剣なので全部峰打ちで倒す。すでに応援を呼んでいたのかまた攘夷浪士達がぞろぞろと駆け付けた。

晋助「チッ！うじゃうじゃって出て来やがって！！」

銀次「高杉！！ここは一旦、人気のない裏道まで走るぜ！相手すんならそこでだ！……！」

そして走りだそうとしたが
「そんな必要はねーよ。」

銀次・晋助「なっ！！！」

一瞬だった。先ほどいた攘夷浪士とリーダーっぽい奴がたった一振りのようにしか見えないような速さで斬られていく。

ズシャアアアアアアア！！！！

悲鳴もなく血だけが舞っていく。そして浪士を斬ったやつに見覚えがある。そいつは……銀髪で……真つ白な服を着てキセルを吹かす……
銀時「久しぶりに……やっと会えたなあ。銀次イ……それに高杉イ。」

銀時がいた。

銀次「兄貴……………」

晋助「銀時……………」

嫌な予感が当たってしまった。もっとも今、会ってはならない人物に会ってしまったから…。

10、再会は派手に（後書き）

あとキャラ誰だそうかな
まだ悩み中です。

次回「大切な人がいない世界なんてないほうがマシ」です。

11、大切な人のいない世界なんて、ないほうがマシ。(前書き)

なんか会話文多いかもしれないです。

11、大切な人のいない世界なんて、ないほうがマシ。

まさか銀次も晋助もこのタイミングでくるとは思わなかった。

晋助「テメー、何しにきやがった？」

右目でギラリと鋭く睨む。

銀時「つれねーなあ高杉。俺あ昔の夢見て、もしかしてって自ら来てやったんだぜ？まさかこんな道端で会えるとはねえ。」

そんな晋助をおかしそうに笑いながら話す銀時。

いつの間にか騒がしかった人ごみは嘘のように無くなっている。

銀次「兄貴……。」

銀次が静かに銀時を見据える。

銀時「クククッ俺をまだ兄貴と呼べるなんてな。ありがた迷惑な話しだぜ。」

無表情で銀次を見て言う。

晋助「テメーこいつがどんな思いを「やめろ。高杉！」……銀次。」

その態度に晋助が切れて反論しようとするが、銀次に止められる。

銀次「なあ兄貴、あんたが俺をどう思っようが構いやしねーよ。ましてや幕府の狗になっちまってるから弟と思ってねーだろうよ。だが、そう思ってなくても俺ああんたがどうなっよう俺の兄貴だ。敵だろうがなんだろうがたった一人の大切な兄貴と思ってんだよ。俺は斬れない……斬りたくねえーんだよ！！」

晋助「……………」

銀次の銀時への思いに黙って聞いている晋助。

銀時「……甘い、甘すぎんだよ銀次。……夢見たんなら何でこの世界を壊さねえ？俺達に生きる希望を与えたあの人を奪った世界を何で壊さねえ！？」

銀次に睨みながら少し声を荒げて今度は晋助のほうを見る。

銀時「テメーは俺達より憎んでんだろうが。何よりあの人から刀譲り受けたのはテメーじゃねーか。何でこの世界を受理し、生きていられる！？」

晋助にも同じく声を荒げる。

晋助「オメー……それは違う。俺があの人から貰ったんじゃない。たった一本の刀でもあの人俺だけじゃなく俺達三人にやったんだ。それは銀時……テメエもわかってんだろうが。」

銀時「……………」

銀時は黙って聞いている。

晋助「人を斬るために刀を渡したんじゃないやねえ。こいつは……………」

晋助は松陽の言葉を思いだす。

《敵を斬るのではない、弱き己を斬るために》

《己を護るのではない、己の魂を護るために》

晋助「そいつは復讐に使うためにあの人…先生が俺達に刀渡したわけでもねー。俺達の魂を護るために、先生の魂がいった刀を俺達に託したんだろーが。」

真剣に銀時に向かって話しているが、銀時はクククツと笑うだけだった。

晋助と銀次は眉を寄せる。

銀時「それであのあと俺達は先生を護れなかったじゃないか。攘夷戦争なんかに参加してよお斬って、斬って、斬りまくって俺達に何が残った？仲間も何もかも失った俺達に何も護るもんなってありやしねーよ。だったら壊すしかあるめえよ。あの人魂があの人に残ってようと、俺あの人を中心で俺の全てだったんだ、あの人はいない世界なんて無くなっちまえばいい。あの人望んでなくともな

」

銀時にはもうこの世界は憎悪、復讐ばかりしかない、いらぬもの
としか考えていない。

もう手に負えないほど変わり果てたかつての友に晋助と銀次は銀時
にこう告げた。

晋助「テメーにはねえだろうが俺達にはあんだよ。護るものがな。」

銀次「戦争で死んでいった護れなかったやつらの分まで今の仲間を
先生の魂引き継いで護りぬく。」

晋助達は更に目を鋭くした。

晋助「だから仲間に手えだしたら」

銀次「兄貴でもゆるさねえ。」

そして

二人「全力で護ってテメー（兄貴）の野望止めてやるよ!」「
最後に二人併せて付け足した。」

銀時は二人の方を黙って見ていたが、晋助のほうをみて「高杉イ、
あんとき斬るって言ってなかったかあ?」と聞いてきた。

晋助「俺はテメーを友ではねー家族と思ってるからな。斬るなんて
………できるわけねーよ。」

晋助の答にキセルを吹かしたため息をつく。

銀時「だから甘すぎなんだよ……まあいいこうなることあ俺あわかってたんだ。俺あテメーらみてーに甘くねーぜ。ぶった斬つてやるよ。今回は帰るぜ。」

そう言つて裏側のほうに消えていった。

晋助「……………俺達も行くか……………ファミレスに」

晋助にらしい言葉に苦笑する銀次。

銀次「この状況でファミレスかよ……………」

多少呆れも入っているが更に「奢ってくれんだろ？」と言われたため

銀次「仕方ねえーな……………行くか」

どこか満更でもないような顔している銀次。

そしてやっと二人はファミレスに向かって行った。

銀時は裏道を通つてる途中、人気がないのに歩くのを辞め、声をか

ける。

銀時「盗み聞きたあ……………往生際悪いぜ？団長さんよあ。」

その正体は神威であつた。

神威「あはは♪やっぱバレバレだったんだね。いやあ出てきたら悪いなあと思つてね」

ニコニコと影から出てくる神威。

銀時「団長さんらしくない行動だなあ？」

神威「失礼だね、総督さんも。俺だって空気ぐらい読めるんだよ？」

若干不思議そうに銀時が聞くが、神威は今だニコニコと笑顔を絶やさずに答える。

神威「で？仲間にすると言っておきながらもこうなることは想定内だったんでしょ」

銀時「ああ……………ただ」

神威「ただ？」

神威が聞き返すが「なんでもねーよ」と逸らす。

たが神威なんとなくわかってしまうと「総督さんも諦めが悪いねえ」
と楽しそうに言った。

それに銀時はククツと笑って「そうかなあ」と呟いた。さらに

銀時「あいつだけでもこっちに戻してやるよ。あいつら（真撰組）
護る必要なんざねえ。またあの時みたいに兄弟で白夜叉として一緒
にぶっ壊そうや。あいつは俺に護れてりやいいんだ。なあ……………」
銀次イ？」

銀時の言葉に神威は…思わず「ブラコン？」と呟いてしまったら、
銀時に「うつせーよ。」とギリリと睨まれ、肩を竦める。

そしてそのまま歩きだして二人とも見えなくなった。

そんな三人を拾った恩人は空の上できつと悲しそうな顔で見守って
いることだろう。そしてもう一人の生徒を心配して。

《どうか……………晋助、小太郎、銀次……………銀時……………またこ
の四人が仲良く揃うことを私は願っています。》

いつのまにか雲一つない空が曇り、いかにもその恩師が泣くような
そんな天気になっていた。

11、大切な人のいない世界なんて、ないほうがマシ。(後書き)

また神威なんとなく出しました。思いつかなかったもので(笑)

次回「刀は使用者によっては最凶最悪な兵器になる」

人斬り赤鬼動く！

目的は真撰組壊滅と……白夜叉奪還！の予定。

12、事件は夜に起きるもの。(前書き)

やっと更新できましたあ……

刀はゝの前に一つ付け加えました。

12、事件は夜に起きるもの。

銀時、神威は自分らの拠点としてある船へと向かっている。

「銀時イ。」

声をかけられ、二人の足が止まる。

銀時「……藤間か。」

そこには待っていたかのように桐生藤間が立っていた。

藤間「俺ももういつでも動けるぜ。」

銀時「そうか。……狙いは決まってるんだろ？」

藤間「ああ。それにこいつの実力を見せ付けてやりてえからな。まっ紅桜のデータで造ったから似たようなもんだろ。」

そう言っただけ……闇桜を鞘から抜くとドクン、ドクンとまるで生きているかのような音をして輝いている。

銀時「ククッそうかい。存分に暴れてこいや。」

銀時がそう言ったあと、藤間は「了解。」と一言残して消えていった。

神威「あの刀、何回見ても不気味だね。さてと、俺もちょっと用が

あるからもう行くよ。」

銀時「用あるとは珍しいじゃねーか。」

神威「夜からでしょ？まあ祭をもつと盛り上げるためにだよ。じゃあね。」

先に神威が消えていった。

銀時「ククク……そういう事が……楽しくなるなあ」

神威の行動を理解した銀時は不気味な笑いを残してその場を後にした。

銀次と晋助はあれからファミレスを出て外を歩いていた。

銀次「あゝあ……俺の懷が寂しくなっちゃったじゃねーか。」

晋助「まあまあいーじゃねーか。こういうこたあ、滅多にねーんだ

からよ。」

更に“次んときも頼むぜ”と言われ銀次はため息しかでて来なかった。

銀次「次からマヨラーの財布持つてくつかな」

晋助「そりゃあいいな。つてなわけでもう俺あ、帰るぜ。」

“じゃあな”といって片手を挙げてさっさと行ってしまった。気付けばもう夕方。

銀次「さて、俺も帰るか。」

屯所に帰るために足を動かすと笠を深く被った青年とぶつかった。

銀次が“わりい”と声をかけたが、青年は何事もないような顔で無言のまま去っていった。ただすれ違い様に“ククツ”と笑い声が聞こえたような気がした。

銀次「なんだあ？あいつ…」

少し顔をしかめたが、指して気にもせず屯所に向かっていった。

近藤「そうか……あいつまだ……」

土方「ああ、あいつ……まだ過去に縛られてる感じがする……」

真撰組屯所では、土方は近藤の自室で今朝の銀次の状態を話した。

近藤「まあ、あいつは昔っから一人で重荷を背負って生きているよ
うな奴だ。自分が苦しんでようが、誰にも頼ろうとしない。まして
や、他人の心配を優先させるそんな奴なんだ……ただあいつ、銀次
が優一頼れるやつらは……あいつらなんだろうな。万事屋もそうだろ
う……」

土方「……………」

近藤の淋しそうにいう言葉に声をかけられなかった。ただ無言になり、
少し手の握る力をいれ、強く握りしめた。そんな土方を見て、近藤
はフツと笑った。

近藤「だが、いつかは必ず俺達を頼ってくる時がくる。絶対にだ。
あいつが俺達を想ってくれてるように、俺達もあいつをそれ以上に
仲間だと、家族だと想ってるんだ。あいつを信じよう。あいつを信
じなければ誰が信じるんだ？」

土方「……………そうだな」

やっぱり近藤さんには敵わなねーな

そう思い軽く笑い、タバコを加えて火をつけた。

すると“今帰ったぜ”という声を聞いて外のほうを見ると、銀次が立っていた。

近藤「おう、銀次！遅かったな。」

銀次「まあ、ちよつとな……てか二人して何してたんだ？」

近藤「いや何も。なあトシ？」

土方「ああ、何もしてねーから気にすんな。」

銀次「はあ？……まあなんもねーならいいんだけどよ……」

疑問に思いつつも、余り気にしないことにして部屋に戻っていった。

近藤「行つたな……さて俺達もさっさと仕事終わらせるか。」

土方「……そうだな……ん？」

部屋に戻ろうとするが、門の外に人がいたが、すぐに歩きだしたので見えなくなってしまった。

近藤「どうしたんだトシ？」

土方「いや、なんでもねー」

……あいつ、どっかで見たような……

疑問に思ったが、銀次同様さほど気にせずに自室に戻っていった。

門の外にいた人物の正体は…

万斎「これから起こることも知らずに、こつも悶々とされるところちまで気が抜けてしまうであろうな。まったく哀れな連中のござる」前に真撰組動乱にいた河上万斎であつた。そしてフツと笑いながら歩きだしていった。

そして夜……門番には二人が見張りをしていた。すると目の前に赤髪の青年が立っていた。

「なんだ！？貴様あ！！」

「真撰組こしになんか用でもあんのか！？」

少し警戒しているため、怒声を含めているが赤髪……藤間には効かなかった。

藤間「何の用があるって？用ならあるさ、楽しい……祭をしになあ」

そして門番の一人を素早く斬り捨てる。

「貴様あああ！！ここがどこだか……」

ザシユ！！

残りの門番も意図も簡単に斬り捨てた。

藤間「耳元で騒いでんじゃねーよ。さて、お前ら存分に暴れようじゃねーか。」

言った瞬間、待ってましたと言わんばかりに隠れていた部下が一斉に出てきた。

少し門あたりが騒がしいと思い、土方が部屋から出てきたと同時に近藤、沖田も出てきた。

そして目の前の群集と、一番前にいる男に驚愕した。

土方「お前はっ！！」

藤間「この前はお世話になったなあ、局長さん、副長さん、それに一番隊隊長さんよお。」

吉原で騒動起こした張本人、藤間がいた。

そして土方達の後ろからゆっくりと銀次が歩いてきた。

銀次「オイオイ、何事かと思い来てみりゃあ……勘弁してくれや。」

近藤「銀次！！」

藤間「おやおや、第二の白夜叉もまた会ったなあ。」

銀次「俺は会いたくなかったよ……」

それに対してククツと笑い

藤間「今回はなあ、真撰組壊滅とともにあんたを頂きに來たんだぜ？うちの大将は頑固なもんだからなあ。」

ゆつくりと刀…闇桜を抜く。

土方らは藤間の発言にさらに驚愕したが、すぐに刀を抜いた。

銀次「ちつ……兄貴もそこまで俺に執着してんのかよっ！！だが、俺の居場所はここなんだよ！てめえら！！喧嘩の時間だ！コノヤロ
！！！！！！」

銀次の叫びとともに零番隊が一斉に駆け付けた。

近藤「総悟、他の隊にも伝えておけ。」

沖田「了解しやした。」

沖田は急いで隊達を呼びにいった。

土方「これなら存分に暴れられそうだな。」

妖刀「村麻沙」を構え、ニヤリと笑う。
近藤も同じく構える。

藤間「おっ、もう殺るのか。死ぬのはお前だったのにな。」

土方「死ぬのは」

銀次「テメーらだぁ!!」

それを合図に一齐に藤間達に斬りかかっていた。

藤間「俺達も行くぜえ!!!」

そして藤間達も銀次達に向かっていった。

万事屋では新八はすでに志村家に帰っており、晋助と神楽はソファでテレビを見ていた。

神楽「晋ちゃん……なんか嫌な予感がするネ……」

夜兔のためか何かを察知するのが素早い。そしてこの男も。

晋助「ああ……何も起きねーと言いだがな……」

顔に似合わず、いちご牛乳を口にして答えると何ともタイミングよくインターホンが鳴る。

「はあ」とため息をつきながらも玄関に行き、戸を開けるが、訪問者の顔を見て驚愕した。

神威「やあ、お待さん。久しぶりだね！

訪問者は神威だった。

晋助「テメエ、何しにきやがった？」

神楽「馬鹿兄貴！！何でここにいるアルカアアアア！！」

いつの間にか神楽も来て傘を持ち暴れようとするが、晋助がそれを制する。

神威「まあまあ、今日は殺し合いに来たんじゃないよ。面白いことが起きてる事を伝えにきたんだよ。」

晋助「何？」

面白いことが起きてる…だと？

不審そうに神威を見る。神楽もだ。

神威「んとね、副総督さんがね、真撰組に乗り込んで今頃ドンパチやってるころだよ。」

晋助・神楽「!？」

神威「目的は真撰組壊滅を表にだしてるけど、本当の目的は白夜叉奪還だよ。」

さらに驚愕した。

神威はケラケラと笑って「総督さんも懲りないよねえ。」と言った。

神威「まっ信じるかどうかは君達次第だね。俺は今回の祭に参加しないよ。まだまだ楽しみが残ってるからね。」

「じゃあね。」と言って万事屋から下へ飛び降りた。

晋助「クソっ、嫌な予感てのは、こいつの事だったかもしんねーな！神楽っ、お前は新八の所に行け！」

神楽「嫌アル！！私も晋ちゃんと戦うネ！！！！晋ちゃんだけ傷付くのはもう嫌アル！！」

着いていくと効かない神楽。

晋助「ちっ……わぁーっ たよ、たくっ……死ぬんじゃねーぞ。」

神楽「晋ちゃんこそナ！！！」

そして普通の原チャリでは有り得ないもの凄いスピードで向かっていった。

それを影で見つめる者…

神威「やっぱり行ったか。俺も参加したかったんだけどなあ。まあ見学くらいいいよね？」

そして携帯を取り出す。

神威「あつもしもし？んーとね悪いんだけどね、見学することにしたよ。……どうせあとから来るんでしょ？わかった、じゃあね」

携帯を切り、…我慢できるかな？…と呟いてすでに行われているであろう場所へむかつていった。

12、事件は夜に起きるもの。（後書き）

次が「刀は使用者によって最凶最悪の兵器になる」です♪

13、刀は使用者によって最凶最悪の兵器になる。（前書き）

夜勤は…眠いです（笑）

13、刀は使用者によって最凶最悪の兵器になる。

原チャリで有り得ないほど飛ばしているが、晋助と神楽はまだ屯所にはついていない。

晋助「あいつら無事だといいいんだがな……」

神楽「あいつらはそんなにやわじやないアルから大丈夫ネ!!!!」

腰に巻き付いている神楽が言つと“そうだな”と呟いた。

そして真撰組屯所が見えてくると

ドカアアアン!!!!

物凄い音が聞こえてきた。

直ぐさまスクーターから下りて駆け付けてその光景を見た。

晋助「何度見ても気味わりいー光景だぜ……」

血に塗れ地面に伏せる隊士や浪士達の光景はまさに地獄絵図。

そしてさらに目を通すと見慣れた四人……近藤、土方、沖田、銀次が四人がかりでも鬼兵隊副総督……藤間に苦戦している。

それを不思議に思うが藤間の持っている刀に目を見開いた。

晋助「ありゃあ紅桜か!?!」

神楽「紅桜つてヅラが殲滅されたんじゃないかったアルか!？」

晋助「とにかく危ねーことには変わりやしねえ!行くぜ!!!」

神楽「了解したアル!」

「黑夜叉あああ!!!」

ガキン!!バキイ!!

「ぐあああああ!!!」

晋助「うぜーんだよ!雑魚に構ってる暇はねーよ!!!」

向かってくる敵を倒しながら進むと何かがこちらに物凄い勢いで飛んできた。

晋助「うおっ!」

ビュン!!!

間一髪避けたため風を切った。

藤間「さすがは黑夜叉、まあこんくらい避けて貰わなきゃつまらねーがな」

飛んだのではなく刀が伸びていた。そしてまたもとのサイズに戻った。

銀次はそれほどでもないが近藤、土方、沖田の三人は所々傷だらけ

である。

晋助「何で紅桜を持ってやがる？」

藤間「ククツこいつあ、桂がへマしたらしくてな、一本残ってたんだよ」

桂がこの場にいれば苦虫を潰したような顔になっていよう。現在晋助もそんな顔をしている。

藤間「だが紅桜以上のもの開発してなあ、その残った一本のデータをとって新たに闇桜として強化させたんだよ。能力は似てるが、あれとは比べものにならねーよ？」

この場で紅桜を見たことある晋助、神楽は驚愕した。それ以上の能力と聞いただけで悪感が走った。

藤間「さて、真撰組の実力も知ったし、先に三人まとめてあの世に送ってやるよ」

その直後、三人に見えないほどの速さで襲い掛かる。

三人「!？」

三人は余りの速さに反応しきれない。…殺られる…目をつぶり、そう思ったとき

ガキイイン!!!

真剣と木刀の二つで受け止めた銀次と晋助がいた。

藤間「ほう、そう簡単にはいかねーか」

銀次「あたりめーだ！そうやすやすと大切な仲間殺されて溜まるかってんだ！」

晋助「テメーの相手は俺達になるぜ！！！」

藤間「フツさつきよりは楽しめそうだなあ」

晋助「うらああああああ！！！」

ガキン、ガキン

自由自在に木刀を操っていても防がれ、藤間に当たることはない。

晋助「チッ」

藤間「今度は俺の番かあ？」

銀次「俺がいるぜえ！！！」

後ろに周っていた銀次がしかけるが

藤間「あめーよ」

また防がれた。そして藤間が闇桜に力を入れた。

銀次は渋い顔をした。

銀次「ぐっ…（なんつつ力なんだよこりゃあ…化け物かよ！）」

そして力負けしてしまい、思いつきり振られたいきおいと吹っ飛ぶ。

晋助「銀次い！！！」

藤間「よそ見はよくねーぜ？」

晋助「なっ！？」

いつのまにか目の前に来られ、下から上へとふり上げられる。
それを木刀で防ぐが……

バキィイ、ドゴオオオ

木刀が割れ、銀次同様吹き飛ばされ部屋の方へ吹っ飛ぶ。

神楽「晋ちゃん！銀ちゃん！」

神楽が気付いて駆け寄る。だがビュンと神楽の元へ闇桜が伸びていく。

土方「チャイナあ！！！！危ねええ！！！」

土方が気付いて叫ぶが浪士達が邪魔で助けにいけない。

スバツ！！

神楽「うつ！」

持ち前の反射神経でなんとか当たり所をずらしたが肩を深く斬られた。

さすがに痛いのか片手で押さえて身構えられない。

藤間「さすが夜兎って言いたいが、別れの時間だ」

.. じゃあな.. と言って振り落とす。

銀次「させねーって言ってんだろーがあ!!!!!!!!!!!!!!」

意識を取り戻した銀次が二刀流で受け止めた。
頭からかなり血がでている。

神楽「銀ちゃん!!!!!!」

銀次「うおおおお!!!!!!」

怒涛の攻めで藤間に襲いかかる。

銀次「高杉イ早く来やがれえええ!!!!!!」

来るであろう場所に刀を投げつけると復活した晋助も頭から血を流しながら走って刀を受けとった。

晋助「てやあああああ!!!!!!」

さつきと違いすざましい勢いでしかける。

藤間「んゝちーつと辛くなってきたかな?」

振り払って距離を置く。そして銀次と晋助も間合いをとる。

藤間「そろそろ本気ですか」

すると藤間が消えた。

銀次「どいきやがった!？」

藤間「おせーよ」

ザン！！

晋助「ごふっ！！」

一瞬にして晋助の懷に入り、脇腹を深く刺した。

神楽「し、晋ちゃああああんんんんん！！！！！！！！！！」

銀次「高杉イイイイイ！！！！！！！！！！」

二人の悲鳴が聞こえた。

藤間「クツクツク、黑夜叉あ、テメーも随分と堕ちたもんだなあ。フン、まじで様あねーよ。目障りだ。もう古い伝説はこの世界とともになく消えろ」

ブシャアアアアア

引き抜いたとき血が吹き出し、ゆっくりと倒れていく晋助に藤間は容赦なく振り落とす。

やめろ……

ドクン

やめてくれ……

ドクン

もう何も失いたくねーんだ……

ドクン

晋助の胴体が離れるまでもう少し。

神楽「いやあああああああ！！！！晋ちゃん！！！！」

身動きできず叫ぶ。

それを聞いた三人も振り向き晋助を見る。

近藤「万事屋アアアア！！！！」

土方「嘘だろ……？」

沖田「旦那……？冗談はよしなせえ！！！！旦那あ！！！！」
信じられない光景に悲鳴をあげる。

頼むから……もうこれ以上

銀次「やめろおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ドクン

銀次の理性はそこで切れた。

13、刀は使用者によって最凶最悪の兵器になる。（後書き）

これからもなんとか早めに更新していきたいと思います……

次回「白き獣の帰るべき場所はどこではない」

それっばいの書けるように頑張ります（笑）

14、白き獣が帰るべき場所はどこではない。(前書き)

どうしていくか考え中です(笑)

14、白き獣が帰るべき場所はどこではない。

あともう少しで晋助がこの世からいなくなる寸前でとてつもない殺気がすぐ後ろにあるのに気づき、振り落とすのをやめ、素早く方向転換した。

ガキイン

銀次が襲い掛かっていた。

それにドサツと晋助が地面に倒れた音も聞こえてきた。

藤間「おっと……危ねーじゃねーかぁ」

銀次「……………」

ニヤリ

藤間「……！」

一瞬ゾクツとした。そして

ヒュン

銀次の姿が消えた。

藤間「何…？」

晋助「ぐっ……銀……次……お……前……」

晋助は何かに気づいたようだ。

気配を感じさせないように藤間の後ろについて背中を斬った。

藤間「ぐあっ！！！！ちっ！！！！」

もう一回振り落としたが藤間は過労じて銀次の攻撃を防いだ。

藤間「（さっきとパワーもスピードも違いやがる！まさか……！）」

銀次「……………」

先程銀次がされた事と同じように刀を振り切り藤間を吹っ飛ばした。

ドゴオオオン！！！！

藤間「がはぁ！！！！」

口から血を吐きつつ、銀次を見て確信した。

あの死んだような魚の目ではない、鋭くギリリと光る闇に包まれた憎悪の目。あれはまさしく…… 銀時と同じ白夜叉の目だ。

藤間「クックククついに化けの皮が剥がれやがった。俺あこいつを待っていたんだあ、第二の白夜叉の姿をよお！！！！」

すぐに立ち上がり銀次に向かっていく。銀次もそれに従い藤間に向かう。

どちらも姿が見えないほどの速さで戦っているのを見ている近藤達。

あらかた浪士達を片付けたようだ。

いつの間にか他の隊士と零番隊の連中もそろつていたが、怪我多数だが、死者もそれなりに出ていた。

沖田「銀次さん……」

土方「あれが銀次なのか……？」

啞然としてゐると、生き残つてゐたのか浪士が倒れている晋助に襲ひ掛かつてゐた。

「黑夜叉あ……！覚悟……！！！」

近藤「まずい……！ 万事屋アアアア……！」

神楽「晋ちゃん起きてヨ！！！！」

晋助「くそっ……思ったより……動けねえや」

結構深くやられたため立ち上がれない。
.. 間に合わない..
神楽も他の連中も誰が思っていた。
だが

グシヤツ

斬った音ではなく、何かを潰した音どころか現れた人物に驚愕した。浪士の胸を腕で貫いた神威がそこにはいた。心臓を貫かれ一瞬にして絶命した。

神威「このお侍さんは俺の獲物なんだから手を出さないでよ♪」

神楽「なんで……お前がここに来ているネ!？」

だんだん回復してきてはいるがまだ肩を押さえている。

神威「いや、帰っても暇だし見学してたんだよ。んでこんな状態な
ったから登場ってわけ」

さらにあつと声を出して

神威「来ているのは俺だけじゃないよ?」

晋助「……………」

だいたいわかっていた晋助は何も言わない。

神威「まあの戦いみてたら誰が来るかわかるよ」

藤間と銀次のほうを向いて呟く。

ガキン、ガキンとどこまでも響く金属音に藤間は楽しむどころかだ
んだんイライラし始める。

藤間「ちつちよこまかと……いい加減斬られてくんねー？」

思いきり闇桜を横に振り回したが、高くジャンプして交わされ、そのまままた後ろをとられた。

すぐに振り向いたが銀次の刀のほうが早かった。

ズバツ

藤間「ぐっ！！！」

とつさに後ろに飛んだこともありそれほど傷は深くない。それが気に食わなかったのか銀次は藤間を蹴り飛ばしたおかげで壁に吹っ飛んでそのままズルズルと座りこんだ。

神威・晋助を除く全員が啞然となる。

藤間「こりゃ、参ったは…俺が解き放ったのは獣なんてもんじゃねーとんだ化け物だよ」

銀次はゆっくりと近付いていく。

藤間「さすがは第二の白夜叉だな……そうだ、あの時のように何の躊躇いもなく俺を殺せ、化け物の血に従って殺せ」

藤間のところに着いて無表情のまま刀を振り上げる。

藤間「テメーはやっぱこつちにいるべき場所だあ、あっちなんて似合わねーよ。お前の戻る場所はここしかねー」

フツと笑い、そのまま目を閉じる。

だが、一向に斬られた感触がない。そして見覚えのある臭いに目を開けるともう一人の白い夜叉が銀次の刀を受け止めていた。

藤間「……………銀時」

銀時「ククク……派手にやられたもんだなあ？ 藤間……」

そして銀次のほうに向く。銀次は目の前に銀時がいることに驚いた。そして刀を納め、それを見ていた銀時も刀を納める。

銀次「……兄……貴……？」

銀時「テメーに会うのは久しぶりだなあ、第二の白夜叉さんよあ」

銀次「……………」

黙ったままの銀次にそのまま続ける。

銀時「お前は本当はあっちにいちやいけない存在だ。お前の居場所は……………俺とこだ」

銀次「! ! !」

そう言つて素早く銀次を気絶させて肩に担いだ。そして何事もなかったかのように進み始めると

近藤「銀次は俺達の仲間だ！ お前を行かせるわけにはいかん！！

土方「そいつを降ろしやがれ！！」

沖田「どこに連れていくつもりでい……!!」

銀時の歩みを真撰組三人が止める。

銀時「どこへだと……? そんなもん、こいつのあるべき帰る場所へ連れてくだけだ」

ちらつと晋助のほうを見た。

銀時「堕ちてるとはいえ、まさかここまでたあ笑いもんだぜ? 高杉イ? そんなんじゃ守れるもんも守れないぜ」

ニヤリと笑いさらに「守れるわけねーがな」と続ける。晋助は黙ったまま睨みつけたが、それを気にせず歩き続ける。

土方「待ちやがれ!! そいつを連れていかせてたまるか!!」

土方の合図で零番隊とともに他の隊士達も銀時、神威、藤間を囲んだ。

銀時「そんなにいびり立つなよ。まあ今回は目的は果たしたからな此処にもう用はねーよ」

すると上空から? 機のヘリの音が聞こえ、ロープがおちてくる。さらにデカイ声が聞こえてくる。

また子「ぎーんとーきーさーまー!! 早くロープを掴んでくださいッス……!!」

阿伏兔「団長!! ちよつとは行動を慎んでくれ!!」

それを聞いていた三人は少し苦笑する。

銀時「やれやれ……またデケエ声出されたら溜まんねーからな。団長さんよお、藤間頼むぜ……」

神威「わかったよ」

座りこんでいる藤間を担ぐ。そしてそれぞれのへりからおちてくるロープを掴み、真撰組を見た。

神威「まあ見てて楽しかったよ」

藤間「じゃーな」

銀時「攻撃しようなんて思うなよ？こいつに当たるぜ？」

真撰組全員今何もできないことに悔しそうな顔をしている。

へりは段々と遠ざかっていき、さきほどの騒動が嘘のように静かになった。

晋助「……………銀次……………」

神楽「晋ちゃん!？」

その声に真撰組の連中もハツとする。

近藤「おい!!!誰か救急車呼んでこい!」

沖田「旦那あ!!!!!!しっかりして下せえ!!!!!!」

土方「万事屋!!!くたばんじゃねーぞ!!!」

ずっと銀時達が去っていった方向を見ていたが、うるさく騒いでいる土方達を見て…

晋助「騒ぐんじゃないー………こんなでくたばるかよ………くたばってたまるかってんだ………」

しばらくして救急車が近付いてくる音がするのを聞いてそこで意識は途切れた。

14、白き獣が帰るべき場所はどこではない。(後書き)

今回は「闇は光を覆う」ですね

鬼兵隊＋銀次メインを
予定してます。

15、闇は光を覆う。(前書き)

とりあえず近藤さんと銀次の出会いシーン＋鬼兵隊ですね(笑) ちょい短いです。

15、闇は光を覆う。

ある懐かしい夢をみた。

銀次「ありや？ここどこだあ！？って高杉もいねーし！！！！やべえ！！戻るにももどれねーし！最悪じゃねーか！！」

終戦とともに高杉と攘夷脱退を決め、行き先も考えずに歩いていたら敵と遭遇し、斬りながら進んでつたらこうなった。

銀次「ったくよあ。高杉探すのもめんどくせーし……あゝ腹減ったな……」

あまり気力がないため、その場に座りこんだ。

こんな状態で敵なんかに出っちまったら間違いなく死ぬな……などと考えていると近くで声が聞こえてきた。

「オイ！！大丈夫か！」

自分より少し上っぽいゴリラっぽい人間が声をかけてきた。

銀次「なんか幻覚見えてきたは……ゴリラが目の前にいる……」

「初対面なのにいきなりゴリラ！？俺は列記とした人間だ！！」
ゴリラっぽい男は叫んだ。

銀次「ギャーギャー目の前でうるせーんだよ……テメー誰だ？」

近藤「俺は近藤勲！江戸に仲間たち上京して警察を立ち上げに行くところだ！」

銀次「なら……普通敵に声かけねーぞ？服装みりゃあわかんדרーが……もうやめた身だがな」

近藤「俺は敵だろーがなんだろーが弱りきつたやつには手え差し延べる、たとえ現・元攘夷浪士だとしてもな！」

銀次は目を見開いて「お人よし過ぎだろ……あんた」というが「お人よし結構！それが俺だ！」と返された。

近藤「どうだ？やめた身なら一緒に来ないか？大歓迎だ！」

銀次「……………無理だろ」

近藤「無理じゃないさ、俺の意見に全員賛成してくれる。それに腹減ったんだろ？」

銀次「……こんな俺を……いいのか？」

近藤「言っただろ？敵だろーがなんだろーうが手え差し延べるって」

銀次「ありがとよ……あんたは命の恩人だ。全力でテーマを守るぜ！」

近藤「おう！頼んだぞ！」

銀次「ああ」

そうして近藤とともに江戸に上京し、真撰組を立ち上げた。そこで夢は終わる。

銀次「ん？ここは……？」

夢から覚めて起きあがると、見覚えのない部屋にいた。

銀時「目が覚めたようだな…」

銀次「！？兄貴！？ってこたあ鬼兵隊んところか！」

銀時「ああ、ここは俺達の船だ」

目の前に銀時がいることに一瞬驚いたが、すぐに状況を理解した。

オレア、あの人斬りとやり合って……高杉が斬られて…

銀次「…っ、俺白夜叉になっちまったのか？」

銀時「ああ……そうだ、俺の部下をお前は殺す手前まで追い込んだ」

銀次「………そうか、近藤さん達は？」

銀時「あいつらには俺あ手だしてねー。あくまで目的は銀次だったからな」

少し沈黙が流れると銀時がまた口を開く。

銀時「もうあいつら守る必要なんざねーんだ……今度こそ俺とともに

にぶつ壊してやるーじゃねーか。オメーは俺が守ってやる…」
銀次は更に頭を抱える。

銀次「俺あ壊せねーよ！あいつらを殺せるわけがねー！！だけどあん時みたいに兄貴とともに一緒にいてーっていう自分もいる！どうすりゃいいんだよ！？」

すでにパンク状態の銀次。

銀時「今はお前はそこにいりゃあいい……逃げれるなんて思うなよ？」

一瞬だけギラリと睨む。

銀次「ぶつた斬るんじゃなかったのか？」

銀時「……俺も甘くなつたもんだ……テメーだけは斬れなくなっちまってらあ……銀次今何もなくていい……もう寝ろ」

じゃあなと手をヒラヒラと振り部屋を出ていった。

ボタンと扉が閉まったあとはただシーンと静まりかえるだけ。

銀次「近藤さん……すまねえな……俺あ裏切っちまうかもしれねー……」

《あんたは命の恩人だ……全力でテメーを守るぜ！》

銀次「俺が本当にあんたを裏切った時、そのときは近藤さん……あんたが俺を斬ってくれ……」

悲しみに満ちた顔でそう呟くとまた眠りについた。

銀時は自分の部屋に戻るとすでに来客がいた。

万斎、また子、そしてあちこちに包帯を巻いた藤間がいた。

万斎「どうだったでござるか？」

銀時「精神的に参っているな……今はそつとしておけ。逃げはしねー
だろ」

また子「逃げたときはどうするッスか？」

藤間「殺すのか？」

銀時「いや……殺すことはしねー。その前にあいつはもう逃がさね
ーよ……絶対にな」

「……」

たまにあるが遠くを見つめて言葉を履く姿に何もいえなくなる。今
もである。

銀時「そっぴゃあ、俺の相棒の場所は掴めたか？」

万斎「掴めたが……もうすぐ屯所に戻るそうだ」

銀時「ククッ……そうかい、戻ってくるのか」

万斎「銀時……まさか」

銀時「そのまさかだぜ？……また子、万斎とともに引き続き調べろ」

また子「は…ハイツス!!」

藤間「俺はどうするといい？」

銀時「念のため銀次を見張つてろ」

藤間「了解」

三人はそれぞれ部屋を後にする。

銀時「また楽しくなりそうだなあ………ククククッ」

さぞ楽しそうに笑っていた。

闇は光を覆うまで消えてはくれない……運命の齒車はまた一つ狂い始めた。

15、闇は光を覆う。(後書き)

今回はNatu様からの許可をもらったので夏美さんとライカさんがでてきます

「現場じゃないとわからないこともある」です。

早くもう家に帰りたい… (笑)

16、現場じゃないとわからないこともある。(前書き)

Natu様から許可をいただいたので予告どおり、
夏美さんとライカさんをだしてみました

16、現場じゃないとわからないこともある。

もう朝と言ってもいい時間、場所は大江戸病院。ここに晋助は運ばれた。運んでる最中、止血はしたがそれまでに血を流しすぎたため危険な状態である。

先程医者から「かなり危険な状態ですが、できる限り手をつくします」と言われ現在待合室にいる。

待合室には近藤、土方、沖田、神楽がいる。

土方が携帯をとりだし電話をかける。

土方「山崎か？お前は屯所で隊士達とともに修復にかかれ。……ああ、手術が終わったらまた連絡する」

パチンと携帯を閉じる音が静かな空間に響く。

すると「神楽ちゃん！！それに近藤さん、土方さんに沖田さん！！晋助さんは！？」

新八それに姉の志村妙がこちらに慌ててきた。万事屋の下にあるスナックにも電話をかけたが、お登勢、たま、キャサリンは現在接客中であり、出てこれないとの事だ。
どうやら土方が連絡をいれたらしい。

神楽「新ハイ……んぐ、ひつく……」

泣きじゃくっている神楽のかわりに土方が答える。

土方「まだ手術中だ……かなり危険で油断はできねーらしい……」

妙「そんな……」

妙は声をだし疼き、新八は握りしめる手に力を入れる。

近藤「すまない新八君、お妙さん……俺達がいながらあいつを守れなかった」

沖田「本当に申し訳ないでさあ……」

沖田も神楽までにはいかないが涙目になっている。

新八「近藤さん、沖田さん……大丈夫ですよ。死んだって決まったわけではありませんから……それにあの人はこれくらいの事で死ぬ人じゃありません。僕達が晋助さんを信じないで誰が信じるんですか」

それを聞き全員が思った。

新八は本当に強くなったと。

すべては高杉晋助という男がいたおかげで身も心も強くなったと……誰もがそう思った。

土方「フツ……そうだな」

近藤「新八君にやられたな」

沖田「地味なくせに……」

神楽「堕眼鏡のくせに……」

新八「ちよつとおおおおおなんか後の二人おかしいんですけどお！

地味言っなあ！！それに神楽ちゃん漢字的に駄よりヒドイんだけど！！」

さっきの空気が台なしになった気がした。

妙「それにしても…つくづく不思議な人ね…」
誰にも気づかれずにそっと呟いた。

するとまた土方の携帯が鳴り響いた。
ディスプレイの画面を見ると「橘夏美」とかかれているのに驚きす
ぐに出た。

土方「夏美！？」

その声にその場にいた全員が驚いて土方を見る。
かけてきた当の本人も。

夏美「うおっ！！ていきなり大声ださないでよ兄貴！！」
橘夏美。

真撰組副長補佐であり、土方の妹分である。さらにはワカバであり
紅組のリーダーの一角でもある。かつては闇の始末屋炎龍エンロンと呼ばれ、
銀時のパートナーだった過去をもつ。

土方「あつワリイ。んでどうしたんだ？」

夏美「いやね、ワカバの仕事終わったから屯所に帰ってきてるとこ。
それだけ」

土方「！？」

啞然していると「じゃあまたあとで」と携帯を切った。

土方「おいっ！？待て！！夏美！？」

ツーツーと無機質な機械音が聞こえる。「このタイミングはやべえーな」と言う。

近藤「今の夏美からだったのか！なんてだった？」

土方「あっちの仕事を終えて帰ってきてんだとよ……」

またもや全員驚いた。

近藤「今……それまじくないか……！？」

沖田「たしかにやばいであ……」

そこに疑問に思う新八。

新八「なんで夏美さんが帰ってきてるとまじいんですか？」

近藤「ああ……新八くんには言っていなかったな。……銀次が鬼兵隊に連れてかれたんだ……」

新八「えっ！？」

妙「銀次って誰なの？」

驚く新八に妙が聞く。

新八「銀次さんは真撰組零番隊隊長で最も危険な過激派攘夷浪士」「白夜叉」坂田銀時の弟なんですよ！！銀次さんも攘夷戦争……第二の白夜叉……って呼ばれてたそうです……」

妙「……！」

妙は「白夜叉」坂田銀時のことは知っていたがまさか「第二の白夜叉」の弟が真撰組にいることに驚いた。

妙「攘夷戦争の英雄の事は知っているわ。白夜叉、第二の白夜叉、黒夜叉、狂乱の貴公子、快援隊隊長（まだ辰馬の異名が決まっていので）が活躍したって。」

土方「白夜叉、第二の白夜叉はさっきの名前の通り、狂乱の貴公子は桂小太郎、快援隊隊長は坂本辰馬。

黒夜叉は……」

ちらつと近藤達を見ると気付いたのか縦に頷く。

土方「黒夜叉は知つてのとおり万事屋…高杉晋助のことだ」

妙「っ！」

まさかあの顔でいつもやる気がなくグータラでチャランポランの人がかつて戦争を駆け抜けた英雄の一人だったとは思ひもなかった。

土方「だが俺達は銀次同様捕まえたりはしねーよ。あいつは攘夷から足を洗ってるからな」

それを聞きホツとする。

近藤「それにしても夏美のほうどうする？」

土方「どうするも何も…山崎じゃあ…」

沖田「どうにもならねーですぜ………確実にバレまさあ」

段々と冷や汗を流して……ぞつとした。

その頃の夏美の方は久しぶりに帰る真撰組屯所の門の前にいた。

夏美「久しぶりに帰ってきたな」ライカ

ライカ「そうだな」

夏美の隣にいるのは相棒のライカ。

夏美「まっ兄貴にやあ、言っているからさほど驚かんでしょ」

そして門を潜ったがすぐに固まった。

ライカ「夏美？どうした？」指さしたほうを向くと同じように固まった。

屯所があちらこちら壊れていて隊士達がそれを修復作業にとりりかかっていたが一人の隊士が二人がいるのに気が付き「姉さん！ライカさん！」と叫んだ。

それに反応したのは山崎だった。

山崎「姉さん！？（ええー！？帰ってくるなんて聞いてねーよ！副長）（泣）」

夏美とライカの姿を見つけた瞬間真っ青になり泣きそうになった。
夏美は山崎を見つけ走ってきた。

夏美「崎さん！！何があつた！？」

そして両肩を掴んで問い詰めた。

山崎「いやあ、いつにもまして沖田隊長と副長、さらには銀次さんの騒動で激しくなっちゃいまして……修理がてらリフォームなんかしちゃったりして……アハハハハ（無理だ！助けてー！！！！！！）」

「

夏美「んな激しくなるわけないだろうがあああ！！！！崎さん……嘘は着かないほうが身のためだよ？」

山崎「えーっと……（泣）」

夏美の勢いにすでに泣きそうになっていると

ライカ「夏美……こりゃあ……」

夏美「っ！！」

ライカが信じられないかのような表情で持ってきたものに思いつきり目を見開く。

なぜなら見覚えのある“洞爺湖”と掘られている木刀が真っ二つに折れていたからだ。

この木刀が折れるなんて……高杉さんに何が！？

それに兄貴達は……？

夏美とライカは山崎を睨みつける。

山崎「（終わった…）わかりました……すべて話します」

昨夜に起きた出来事を離れた。人斬り赤鬼である鬼兵隊副総督、桐生藤間が隊を率いて屯所に襲撃した事を。そして藤間のもっている不気味な刀……闇桜で晋助が斬られた事で目の当たりした銀次が白夜叉化したのが春雨の一味とともに途中でできた銀時に連れ去られたこと。土方達は救急車で晋助が運ばれ、パトカーで追ったこと。目的は真撰組壊滅という名の第二の白夜叉奪還だったこと。

夏美「嘘だろ…？銀次の兄貴が…それで高杉さんは！？」

それにあの銀時さんまで来ていたとは……

ただ驚くばかりだった。

山崎「さきほど副長から連絡がきまして……非常に危険な状態だそうですね……手術終わり次第連絡がくるはずなんです……まだきてないんです……」

あの高杉さんが…死ぬ…？有り得ないのにそのことがどうしても脳裏に浮かぶ。

夏美「崎さん……大至急車をだして！私じゃあ達も行くよ！」

山崎「はい！」

そして山崎が用意したパトカーに二人は乗り病院に向かった。

仲間が失っていくのはごめなんですよ……高杉さん……だからど

うか無事で……

パトカーの中でひたすら、晋助の無事を願っていた。

こちらは病院……あれからどのくらい時間がたっただろうかと思うくらい長く感じた。その度に不安だけが段々大きくなっていく。

神楽「晋ちゃん……晋ちゃん……」

新八「晋助さんは絶対大丈夫……」

妙「……」

土方「……チッまだかよ……」

沖田「旦那あ……生きててくださいえよ……」

近藤「万事屋……」

すると「兄貴っ！！」と声がしたので振り返ると夏美、ライカ、山崎の三人がこちらに向かってきた。

土方「夏美!!」

夏美「兄貴っ!!なんぞっ……私しやあ達に黙ってたんだい!?状況が変わっていたかもしれなかったのに!!」

土方「すまねえ……お前まで巻き込ませるわけにはいかなかったんだ……もしあそこにいたら炎龍に戻っちまって俺達の声も届かなくなっただけに連れてかれちまうと思っただ……」

夏美「私しやあ兄貴が思ってるより弱くねー炎龍に戻りかけても兄貴達が声ださなくとも、いてくれるだけで兄貴のところへ戻ってこれる。いてくれるだけで間違っただ道を正しい道に導いてくれる……私にとって兄貴達はそれほど大きい存在なんだよ!」

続けて「万事屋のみなさんもな」と新八と神楽のほうに顔を向けて笑う。

それをみて新八と神楽は泣きそう顔をさらに歪ませる。妙までも。

夏美「だから銀次の兄貴を正しい道へと導きに行かないとな」

土方「そうだな……夏美……ありがとな」

夏美の頭を撫でる。

近藤・沖田も礼を言う「とういたしまして」と笑って返す。

そして手術中のランプが消え、自動ドアから先生が出できたのを見計らって一斉に詰め寄った。

神楽「晋ちゃんは無事か!?無事アルか!?!」

胸倉を掴んで先生を揺らす。

新八「か…神楽ちゃん！落ち着いて！！」

神楽「落ち着いてられるかああああ！！！！！！」

新八が宥めようとするが効がなく、ぐわんぐわんとさらに揺らす。

先生「おっ落ち着いてください！！手術は無事終了しました。回復の早い方なので一日休んでもらえれば目を覚ますと思います」

それを聞いた瞬間、手を離してへなへなと気が抜けたようにその場に神楽は座りこんだ。

新八達も一安心する。

去っていく先生を一礼して座りこむ。

夏美「まさか久しぶりの再開がこうなるとはねえ」

こんな展開を予想してるはずもなく苦笑する。

そして心なしに晋助が穏やかな顔で眠ったまま看護師達により部屋に運ばれ、それに着いていき一緒に部屋に入った。

晋助が目覚めるまでと夜遅くまでずっと暗くなるまでそばにいたがさすがに限界か全員眠っていた。夏美ももう少し起きてようと思っただが、限界だったためすぐに夢の中に旅立っていった。

それがあとあと後悔するものとなる。

全員静まり返って暫く立つと、今まで閉じていた右目をゆつくりと開く。

晋助「ここって病院か？」

そして辺りを見渡すと懐かしい顔といつものメンツが揃いに揃って眠っている。

晋助「久しぶりだな。夏美イ」

起きないように小さな声で言う。それでも気配に敏感な夏美が起きるはずだが、皆がいるため落ち着くのかぐっすり眠っている。それに苦笑して謝る。

晋助「すまねえな」

ゆつくりと起き上がりいつもの派手な服をきて部屋でて病院を後にした。

向かった場所は……万事屋晋ちゃん、つまり自分の家。着いたあとは部屋に入り襖からある刀を二つとりだす。一つは紅桜の時に使った龍の装飾がついている刀。折れたのだが鍛冶屋の鉄子が同じのを造り、《あんたみたいな男が持っていたほうが幸せだ》と言われ、渡されたのだ。もう一つは赤い鞘で恩師、吉田松陽からもらった恩師の想いと魂の籠った刀だ。

その二つを取り出して玄関をでる。そして階段をおりて歩こうとすると、うしろから「どこへいくんだい？」と声がした。そこにはお登勢が立っていた。

お登勢「病院抜け出して、そんな怪我で物騒なもん持って何しですか
すつもりだい？」

晋助「ちよいと馬鹿兄貴の弟をあいつら（真撰組）に取り戻しに行くんだよ」

晋助が昔何をしていたかを知っているため、すぐに把握した。

お登勢「わかってんのかい？戦友かも知れないけどさ、あの男はいずれ春雨の一部どころか全部を丸めこもうとするつもりだよ。あの男ならでき兼ない……それでも行くのかい？」

それに対してお登勢の方に振り返る。

晋助「あいつを止めることができないのはあいつと共に苦しみを分け合い、幾多の戦場を駆け抜けた俺達しかいやしねーんだ。まだ本当の戦場を知らないあいつらには荷が重過ぎる。まあ……ただ担にあいつらの傷つくとが見たくねーだけなんだけだよ、やつぱり傷付くのは俺達だけで十分だ」

お登勢「結局あんたが傷つけば同じなんじゃないのかい？」

晋助「そうかもしれないな。それで救えるのならそれでいい、それで生きて笑えるならそれで結構じゃねーか。だから約束する。必ず生きて帰るってな」

続けて「侍は果たせねー約束はしねーからな」と不適な笑みを浮かべる。

それに負けたのか呆れるように「……………生きて帰ってきて家賃払いな」といった。

フツと笑って「了解」と完全に背を向き、片手を上げて歩き始めた。

お登勢は見えなくなるまでその姿を見つめて、こう言った。

お登勢「まったく……………馬鹿な息子を持ったもんだよ」

また呆れるように笑って中に入ってしまった。

晋助「とりあえず……………まあヅラんとこ行くか。辰馬とも連絡とれねーからな……………夏美はそろそろ起きてるころか？わりいがあいつにも真撰組同様傷つけるようなことはさせたくねー。だから……………」

今回だけでも大人しくしといてくれよ？

そして晋助は桂がいる隠れ家のもうに向かい、暗闇に消えていった。

16、現場じゃないとわからないこともある。(後書き)

どうでしたかね？口調あつてんのかな？

Natu様、足りない点や何かご不満があれば遠慮なく言ってください！できる限り改善していきますので！よろしく願いします！

次回「侍は立ち上がる」です！

17、侍は立ち上がる。(前書き)

思いつきながら書きました。

17、侍は立ち上がる。

晋助がいなくなってから暫く立つと漸く一人……夏美がぼやけながらも目を開ける。

辺りはまだ暗いのもう一眠りに入ろうとするが、ふと晋助が眠っているであろうベットに視線を移すが、やけにひらべったい。

夏美「……………ん？」

目を擦りだんだん覚醒してくると晋助がいないことに気付く。

夏美「なっ?!」

まさか……高杉さん……銀時さんの所に!?

そんなことを脳裏に浮かぶと近くに置いてあつた翡翠刀を手に持つて部屋を部屋を出ようとするが視線を感じ、振り返る。

夏美「……………ライカ、兄貴……」

土方「行き先はわかってんのか？」

ライカ「まさか相棒である私置いてくなんてこたあねーよな？」
こちらに鋭い視線を送られると、はあとため息をついた。

夏美「わぁーっ たよ……先に桂さん所だと思っ」

土方「ったく……お前もあの野郎も好き勝手に動きやがって……」

ライカ「そういう人達だから」

二人の言葉に思わず「アハハ」と声を漏らす。

土方「本当は万全な体制で取り戻しに行くつもりだったが……んなこと言ってる場合じゃねーな。仕方ねー…行くぞ！」

夏美・ライカ「了解！」

そして今度こそ部屋を出て桂の元へパトカーで向かった。

「あつあなたは高杉さん！」

隠れ家の近くで見張りをしていた浪士が晋助がきたことに気づいた。

晋助「よお。ツラはいるか？」

「はい！中にいます！」

そして「こちらです」と桂のいる場所へ案内された。
そしてコンコンと戸を叩く。

桂「どうした？」

「高杉さんがお見えになってます」

桂「！わかった！入ってこい」

晋助が来たことに驚いた。そして桂の部下は「失礼します」と頭を下げて配置に戻っていった。

晋助「よお。ツラア」

桂「ツラじゃない桂だ！高杉！お前、身体のはうは大丈夫なのか！？」

真撰組への鬼兵隊襲撃との情報が入っているため晋助が大怪我をして入院していることは知っていた。

晋助「耳に入ってくるの相変わらず早えーな……まあなんとか」

桂「うちの情報網を舐めるでない。それより貴様……その刀……！」

目の前にある赤い鞘を見つけ目を見開く。

晋助「銀次をあいつから取り返しに行くんだよ……場所はわかるか？」

桂「ああここからもう少し先にある港に銀時の船がある。間違えなくそこにいるだろう……俺も協力するぞ！」

と立ち上がろうとすると

ドス

晋助は桂の懷に入り鳩尾を食らわせる。

桂「グッ……貴様まさか……！」

晋助「すまねえな……やっぱりお前まで巻き混ませるわけにはいかなー。場所あんがとな……」

そう聞こえすぐに意識が途切れた。

晋助はそのあと桂の部下を呼び、桂を布団に寝かせると「高杉さん……まさか！」と声を上げると晋助は「桂あ、頼んだぜ？」と言ってでていった。

やっぱりこういう役目は俺一人で充分だ

そう思い夜の道を歩き、目的地に向かう。

それは見ていた人物を気にもせずに。

その男は晋助をしばらく見たあと、携帯を取り出した。

くある港く

此処には一隻の船が留まっている。

そして船の外にでてキセルを吹かして携帯で誰かと話していた。

銀時「そうかい。高杉がねー。しかも一人とは……ククッ命知らず
とは言いてえがそんなヤワな野郎じゃねーからな」

電話の相手は万斎だった。

万斎「もうすぐ黑夜叉がそちらに着くであろう。どうするでござるか？」

銀時「どうするも何も派手に歓迎しようじゃねーか。今回奴もその
気だろうしな」

港の方を見つめるとわすかだが、一人の男がこちらに来ているのが
見える。

万斎「わかったでござるよ……拙者もそちらに向かう」

銀時「ああ」

そう言つて携帯を閉じる。

銀時「相棒を炎龍に戻す前に高杉と殺り合わねーとはねえー……い
やっどつちもかぁ？ククッ」

未だにキセルを吹かし夜空を見つめ不気味に笑った。

一方の土方達。

桂の隠れ家の近く、見張りの届かないような場所に置いた。

土方「夏美、一人で大丈夫か？」

夏美「なんてったって相手は桂さんだから何も起こりはしないさ。兄貴まで行ったらそれこそ大惨事だよ」

ライカも頷き、土方は苦笑して「わかったから行ってこい」と言われ、頷いて桂の所へ向かった。

「夏美さん!？」

見張りがその声を上げると「どうも、桂さんいる?」と返す。

「いますけど大変なんです!」

見張りの慌てぶりに驚き、「何があったんすか!？」と聞き返す。

「先ほど高杉さんが来て、少しして高杉さんの呼ぶ声で行ってみました、桂さんを気絶させたんですよ!」

夏美「!?!?それで!?!」

「もしかしてと聞いてみたら」桂あ、頼んだぜ?」って残して港のほうに向かって行っただんです!」

あの人は!!!一人で解決させよう!?!最初^{ハナ}っからそのつもりで……

あまりにも勝手すぎる行動に怒りを覚える。

夏美「それで港の場所は!!」

「はい!ここからもうちよつと行くと見えてくると思います!!」

夏美「ありがとう!!」

そう言つて車に急いで戻つていった。そして土方達に事情と場所を伝え猛スピードで走り出した。

銀次は部屋の窓から夜空を見つめて視線をずらすと、見知った人物がこちらに歩いてきている事に驚愕した。

その外にいる人物も視線に気づき、ニヤリと笑う。

なんで……なんでテメーがこんなところに一人できてんだよ!……
高杉!

その人物は真正正銘、高杉晋助そのものだった。

ものすごい勢いで部屋を出ようとしたが、その前にガチャッとドアが開く。

銀次「お前は……河上万斎……」

万斎はすでに帰ってきたようだ。

万斎「どうやら鼠が一匹入りこんだようだな。主にも着いてきてもらいたい」

銀次は頷きそれに従った。

「お前は！黒夜叉！？」

晋助「そうだけど？」

襲いかかってくる銀時の部下に刀を抜こうとしたが「待つッス！！」と声が聞こえ、どちらもピタッと止まる。

また子「黒夜叉！こっちッス！！」

晋助「認証済みってわけか……」

納得しながらまた子に着いて行く。

そのまま奥に進むとそこには神威、阿伏兎、変平太、万斎、銀時……そして銀次がいた。また子も銀時達のいる方へ戻る。

銀時「よお……高杉イ、この前ぶりだなあ？」

晋助「……………」

晋助は黙ったまま前と同じように睨みつける。

銀次「高杉……なんでそんな状態で来たんだよ……バカヤロー」

歯をギリギリと噛み締める。

晋助「馬鹿で結構。俺あ昔からこうなんだよ。誰にも頼らず一人で終わらそうとする……そういう奴なんだよ俺あ。頼りたくても自分の武士道がそれを許さねーんだよ」

そう言つて紅桜の時に使った刀を抜いた。

銀時「そっちの刀じゃあねーのか？」

銀時も刀を抜く。

晋助「こいつあ、らしくねーがお守りみてーなもんだよ。万が一以外はな」

銀時「ククツそうかい。テメーら手えだすなよ」
全員頷くと銀時と晋助は同時に走った。

晋助「はあああああああ……！！！！」

銀時「うおおおおおおお……！！！！」

ガキイイン！！

二人の刀が交わり、白夜叉と黑夜叉の世紀の一戦が幕を開ける。

銀次「結局こうなのかよ……！」

銀次それを歯を食いしばりながら悔しそうに呟いた。

17、侍は立ち上がる。（後書き）

映画見たいけど暇がない（泣）DVDでるまで待とうかな……

次回は……タイトル未定です（笑）

18、頼れないものがそこにはある。(前書き)

こちらでも忘れず更新(笑)

18、頼れないものがそこにはある。

土方達が晋助がいるであろう港に向かっている時、病院では夜間での看護婦懷中電灯で病院内の見回りをしていて晋助の寝ている部屋に入っていく。

周りには近藤達が寝ているのにクスツと笑いベッドのほうに目をやると飛び出せんばかりに見開く。

「！？先生！！大変です！高杉さんがいません！！！！」

叫びながら先生のほうへ走って部屋を出た。
騒がしくなり近藤は目を覚ました。

近藤「な、なんだあ？」

そして周りを見渡し、ベッド中心に目を置くと驚愕してしまった。

近藤「万事屋！？」

その人物はそこにはいない。

近藤「トシ！！！！万事屋が……………！！？」

土方が眠っているであろう場所に目をやるとさらに驚愕した。

土方、ライカ、夏美もいないからである。

近藤「オイ、みんな起きろ！！」

慌てて沖田、神楽、新八、妙を起こす。山崎はすでに屯所に帰っていた。

目を覚ました四人も周りを見て驚く。

沖田「こりゃあどういうことでさあ！？なんで旦那と土方さん達がいらないんですかい！？」

近藤「おそらく原因は万事屋がいなくなったことに気づき追いかけつたつてとこか……」

新八「あんな体で……あの人はいつもそうだ！」

自分がどれだけ傷つこうともフラリと消えて帰ってきたかと思えばまたひどく傷つけたまま戻ってくる……誰にも頼ろうとしない……
…！
神楽も同じことを思っているのであろう怒りで震えている。

近藤は携帯を取り出し電話をかけた。
でたのは山崎。

近藤「山崎か！？万事屋が消えた！！トシ達も後を追っている、おそらく坂田銀時の所だろう……すぐに場所を突き止めてくれ！！」

山崎「！！？はい！！わかりました！！」

山崎も一瞬驚いたが頷き電話を切った。

そしてまもなく山崎から“ある港”にいることを知らされ向かう。

近藤「お妙さん！あなたは俺達またあの馬鹿をここ（病院）に戻ってくる！だから待っててもらえませんか！！」

その言葉に妙は心配になりながらも頷く。それを見てから近藤達は

走り去っていった。

妙「……本当にどうしようもない馬鹿な人……晋助さん」

そう呟いて全員の無事を祈る。

「てやあああああ……！！！！！！」

「ククク……」

鬼兵隊の船ではキン、キンと金属音が聞こえる。

神威「吉原でみた時とは人が変わったような感じだねー。やっぱりあのお侍さんは面白いや」

ますます戦いたくなつたよ……とニコニコと笑っている。

阿伏兎「あんなのに巻き込まれたらあんただってひとたまりもないだろ」はあとため息をはいたのを見ると神威は「だろうね」と返した。

銀次、万斎、また子、変平太、藤間は静かに戦いを見守っている。

またさらにガキンと大きな音が聞こえる。

銀時「平和ボケしてるわりには鈍ってねーみてーだなあ。そこは変わってねーことには安心したぜえ？」

晋助「誰かさんが騒動起こしてくれるおかげで鈍るのも鈍んねーんだよ！」

銀時「ククク違いねえ……」

そして二人は離れて間合いをとり、同時にすばやく動く。

ザシュ×2

今度は刀の音ではなかった。晋助は左肩、銀時は脇腹を薄く斬られた。

また子「銀時様!!」

銀次「高杉っ！兄貴っ！」

二人は叫び、また子が「黑夜叉！貴様あ！」と銃を構えようとするが銀時の鋭い視線に怯え渋々ししまう。

銀時「ククツやっぱりオメーと殺り合うのはおもしれーよ」

更に「最初っからひきずりだそうなんて馬鹿なことしねーほうよかったな」と付け足した。

晋助「ケツ俺あ面白くもなんともねーんだよ……もつともテメーとはこうなるとは思っていたがな」

悪態付きながら話す晋助に銀時はさぞおかしそくに笑う。

銀時「そっぴゃあ夏美のやつ帰ってきたみてーだなあ」

そのことに晋助は驚き、銀次も違う意味で驚いた。

銀次「夏さん……帰ってきたのか」

晋助「銀時……お前、あいつも戻そうとしてるのかよ」

銀時「奴はもともとこっち（闇）側なんだぜ？当たり前な事聞くじゃねーよ」

一度闇に堕ちた人間は表では生きていけねーんだぜ？と付け足して晋助に無表情のまま言った。

晋助「もうあいつも銀次も巻き込むなよ……お前がどう言おうとこいつらをあっちへ返すのがオレの役目だ」

銀時「フン、何言つてやがる俺達と同じ闇に生きてきたんだろーが。あっちに返す？俺に返すの間違いだろーが」

晋助「……テメーとはどうやっても決着つけねーとならねーらしいな」

刀をしまい、今度は赤い鞘から刀を抜く。

銀時「そいつあ万が一のためじゃなかったかあ？」

晋助「こいつでテメーの腐った魂叩つ斬ったほうがいいと思ったんだよ」

そしてお互いニヤリと笑い、踏み出そうとしたが

ドオオオオオオン！！！！！！

と大きな音がなりだした。

「し、真撰組だああああ！！」

浪士の声をした方角を見ると土方、夏美、ライカの三人がいた。

夏美「高杉さん、銀次の兄貴無事ですかい？」

土方「たくつオメーは……」

ライカ「まあまあ」

夏美は晋助達を確認して土方が呆れながらタバコに火をつけ、ライカがそれを宥める。

晋助「テメーら……」

銀時「クククっ手間が省けたぜ……なあ夏美イ？」

夏美「銀時さん……ご用改めです。神妙にお縄についてもらえませんか？」

銀時に刀を向けて睨みつける。

銀時「そいつぁ無理な話だな」

銀時はそれに対して不適な笑みを浮かべたまま刀を納め銀次を連れ

てその場を立ち去ろうとする。

土方「テメー待ちやがれええええ！……！！！」

晋助「銀時っ！！」

銀時「続きはこいつらを相手にしてからだ」
その瞬間また子達が立ち塞がる。

銀次「……………」

銀次は黙ったまま銀時を見た。
何かに気づいたの銀時は晋助のほうを見てこういった。

銀時「……………どうやら弟とも決着を着けないといけないらしいな
あ」

銀次「兄貴…………」

銀時「……………着いてこい」

二人は奥のほうに消えていった。

18、頼れないものがある。(後書き)

次回は近藤達もその場にやってきますよ～
《頼れないものがあると諦めが悪い》です。

19、譲れないものがあると諦めが悪い。（前書き）

途中から銀時＋銀次＋晋助メインです。

土方達の活躍？は次くらいかな（笑）近藤らも次を出番に…（汗）

19、譲れないものがあると諦めが悪い。

晋助は銀時達が去っていた方向を見つめた後、それを追うように走りだした。

それをいち早く藤間が気付いて行く手を阻む。

晋助「そこをどけや」

晋助にしては珍しく今までにないくらいの殺気を放ち、ドスの効いた声を浴びせる。

これには土方は冷や汗を感じ、夏美とライカは“切れちまったよ”と苦笑した。

土方だけでなく藤間達も冷や汗をかいている。神威を除いて。

神威「あのお待さんは本当に楽しませてくれよね」

ニコニコと笑顔絶やさない。

藤間「そいつはできねーな。兄弟での決着だ、あんただろうと手は出させねーぜ」

通さんとはかりに闇桜を抜く。そして”また餌食になってもらうぜ？”と不敵に笑う。

晋助「どけつつーのかわかんねーのか。あいつらが兄弟だろうがなんだろうが関係ねーよ」

じりつと闇桜を構えられても前にいる藤間に一歩、また一歩と近寄る。

晋助「兄弟だからって？そんなんで遠ざかっていったまるかよ……あの人があうずつと昔から三人だった俺達にそんなもんは……関係ねーんだよオ……！」

もの凄い速さで切り掛かった。

晋助「あのバカ（銀時）は銀次と俺が止めてやるよ」

藤間「晋助の力に驚愕していた。

藤間「（その傷だらけの身体でなんつうバカ力なんだよ……！こいつが黒夜叉の力！？）」ギリリとせり負けているのに戸惑いを感じた。

土方「俺達も行くぞ……！」

土方の言葉に夏美、ライカも頷き走りですが、目の前に万斎が立ち塞がる。

土方「俺はこいつと殺りあう……行け」

夏美は心配そうに見ていたがライカに促されてそのまま走り出す。

万斎「土方十四郎であつたな……あの時と同じ凶暴なメタルでござるな」

土方「何訳のわからねーことを言っただやがる！そこをどきやがれ……！」

万斎「お主達が行こうと何も変わらぬ。所詮白夜叉は白夜叉。銀時

の手によつて戻るのが定め」

”所詮は元々こちらの人間だった事でござるよ”と再につけた瞬間、土方は素早く剣を抜いて斬りかかった。それを見ていた万斎もそれを防ぐ。

土方「あいつは……銀次はあの野郎ごときでコロコロと変わるような奴じゃあねーんだよ！テメーらごときにあいつの魂は折れねーよ！！」

万斎「ほう……ではならば貴様らが潰ればどうなるであろうな！」

土方と万斎は対峙する。

夏美とライカは走る。行く先は銀時と銀次のところへ。
だが

夏美・ライカ「！！」

突然襲いかかった衝撃を塞ぎ、退く。

神威「へえ、やっぱりあんたらも只者じゃあないってわけだ」

阿伏兔「まあうちらもあれに逆らいたくないんでね。ここでちつと立ち止まってくると助かるんだがね？」

現れたのは夜兎族二人。

夏美「あちゃあ、これはちつときついもんがあるって」

ライカ「でもまあ、こっちも」

夏美・ライカ「譲れないもんがあるってわけさ!!」

夏美「人間の下に着いた夜兔族に」

ライカ「私ら人間様に」

夏美・ライカ「勝てるわけないだろうがあああああ!!!」

怯まず反撃する二人に神威は楽しそうに阿伏兔は面倒くさそうにしている。

神威「やっぱ人間って面白いね阿伏兔」

阿伏兔「ああ、最高にむかつくらいにブチ殺したくなっちゃうくらいに楽しいよなあ? 団長」

神威「ヒュー」切れちゃってるよ。まっそのほうが楽しいからいいか」

神威・阿伏兔「あんま舐めてつと間違つてブチ殺しちまうぞ」

凶悪な笑みを浮かべて二人も反撃する。

土方・万斉、夏美とライカ・神威・阿伏兔と二組の壮絶な戦いが切つて落とされた。

19、譲れないものがあると諦めが悪い。(後書き)

やべえ銀時と銀次メインじゃねえええ(泣)

次メインだと思います。

20、白と白（前書き）

戦いと、銀時と銀次の心境です。

20、白と白

所変わって船の上には二人の白が夜の空を眺めている。

銀時「なあ」

銀次「…なんだよ？」

銀時が後ろにいる銀次に振り向く。

銀時「お前がいるその世界……楽しいか？」

雰囲気を感じるがなんとなく物悲しげな表情だと銀次は思った。

銀次「ああ……楽しいぜ？あの時に戻ったみたいでな」

銀時「……………」

銀次「あいつらも馬鹿だよなあ、単身で敵地に乗り込んでたった一人……いや、二人か？少なくとも高杉は俺だけじゃなくて兄貴……あんたを救おうとしてる」

銀時は黙ったまま、江戸の夜空を眺めている。

銀次「なあ、兄貴……まだ遅くねえよ」

銀次の声が響いてる中、キセルを取り出して吹かす銀時。

銀次「先生はもういない、それは決定事項だ。いくら頑張ったって

あの頃には戻れない。先生がいたあの頃にはな」

哀愁ただ酔わせながらぼつりぼつりと話す。

銀次「けど、まだ俺達がいるじゃねえかよ。誰一人欠けちゃいない俺達五人が」

銀次「あの時みてえに馬鹿騒ぎだつてできるし、静かに飲み交わすことだつてできる。例えば敵同士だったとして俺達の思いは変わらない」

銀次「だから、ここで全て終わらせようじゃねえか。アンタ抱えている思想を今日ここで断ち切らせてやる」

決心が着いた。もう迷いはない。今の生き方も全部変える気は毛頭ない。そんな目で銀時の背中を見つめて刀に手をかける。

銀時はフーっと吹かした後、ゆっくりと銀次のほうへと振り向く。

銀時「……テメエとこうやって真剣に殺しあう日が来るたあな」

銀時「俺は止まらねえ。俺が止まる時は、全部壊れた後だ」

ニヤリと挑発的に笑って刀に手をかけた。それが合図。

「うおおおおおおお！！！！！！」

二人の相対的な思い刀がぶつかりあった。

20、白と白（後書き）

短いですがここで終了です。

次は長くなる予定です。

21、黒い夜叉だって止まることを知らない（前書き）

明日から三連休

21、黒い夜叉だって止まることを知らない

晋助「おらあっ！！」

スピード、自由自在の剣捌き。この前と桁が違う。藤間は冷や汗を掻きながら思う。

（闇桜以上にこいつの力が上だってことがよっ！）

分析するとそうなるが、藤間はそんなものは認めない。

藤間「認めねえ！認めねえぞおおおおお！！！！！！」

晋助「うおっ！？」

グオンと力づくで薙ぎ払う。晋助は避けて、少し距離をとる。

藤間「黑夜叉ああああ！！！テメエはやっぱり銀時には会わせねえ！！！！」

ギュンと闇桜の力もあつてか人間とは思えない速さで近づく。

しかし、それを見ている晋助は冷静だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0231k/>

晋魂～しんたま～

2011年10月6日19時18分発行